

咸豊3年の焦灼―曾国藩の水師建設

浅 沼 かおり

はじめに

- 1、咸豊3年という年
- 2、長沙
- 3、衡州
- 4、呉文鎔の死

おわりに

咸豊2年	壬子	42	11	曾国藩は湖南省の団練郷民捜査土匪諸事務を幫同辦理せよとの上諭が出される。
			12	武昌が陥落。曾国藩、長沙に到着。
咸豊3年	癸丑	43	1	安慶が陥落。
			2	南京が陥落、太平軍の都になる。鎮江が陥落。向榮が江南大營をおく。揚州が陥落。
			3	琦善が江北大營をおく。廬州が安徽省城となる。
			5	安慶、再び陥落。
			6	雷以誠が、揚州仙女鎮で釐金を始める。
			7	湘勇が、南昌で敗北。
			8	塔齊布が永順協兵に襲撃される。曾国藩、衡州に到着。
			9	呉文鎔が湖広総督に着任。漢口、漢陽が陥落。
			11	彭玉麟、楊載福が曾国藩の兵營に来る。
			12	廬州が陥落、江忠源、陳源 亮 ら死す。
咸豊4年	甲寅	44	1	呉文鎔、堵城で死す。曾国藩、湘勇を率いて衡州を出発。「討粵匪檄」を発する。

関連事項年表（咸豊2年11月－咸豊4年1月）黎庶昌撰、李瀚章審定、梅季校点「曾国藩年譜」（黎庶昌・王定安等編撰、李瀚章・李鴻章審訂『曾国藩年譜（附事略・栄哀録）』岳麓書社、2017年）、郭廷以『太平天国史事日誌』台湾商務印書館、中華民國65年に拠る。

はじめに

咸豊3年は、咸豊帝や曾国藩にとって「焦灼」の年であった。咸豊帝の実録や曾国藩全集の随処にこの文字がある。南京・揚州・鎮江の三城が相次いで太平軍に奪われ、そのうち南京が「天京」と改名されて太平天国の都となったのが、この年である。三城のうち、南京と鎮江は江南すなわち長江の南岸、揚州は江北すなわち長江の北岸に位置する。咸豊帝は、琦善と向榮の軍隊に期待したが、いつになっても三城を取り戻すことができなかった。曾国藩

は、咸豊2年の末に湖南省の省都・長沙に到着した。長沙では土匪の取り締まりと兵・勇の訓練に励んだが、正規軍である緑営の抵抗に遭う。衡州に移った曾国藩は寄付金集めと水師建設に尽力する。本稿では、そのなかで曾国藩が、どのような困難に直面したかを中心に考察していきたい。なお、南京については、史料のなかで江寧、金陵などの呼称も使われる。また、中国語の「省」には行政区域としての「省」のほかに、「省城」という意味もあるので、以下、記述が繁雑になる箇所がある。

1、咸豊3年という年

琦善（1790-1854）、字は静庵、博爾濟吉特（ボルジギト）氏、正黄旗満洲、世襲一等侯である。博爾濟吉特は満洲旗に属したが、もとは蒙古のチンギス・カンの黄金家族の姓氏である。蒙古諸部で最初に衆を率いて後金に來朝したこの氏の地位は尊貴なものであった。アヘン戦争前夜に欽差大臣として広州に赴いた琦善は、イギリス軍の香港占領により、再審待ちの絞首刑〔擬絞監候〕となったが、道光22年に再び起用された。道光26年には四川総督、道光28年からは協辦大学士を兼ね、道光29年には陝甘総督となり、青海辦事大臣（西寧辦事大臣）を代理していたとき、回匪などを討伐したさいに妄りに人を殺したという罪に問われた。咸豊2年、吉林で尽力して贖罪〔効力贖罪〕せよという判決が出たが、まもなく釈放されて帰った*¹。太平軍が勢いを増すなか、琦善は咸豊2年11月11日に河南巡撫代理に任命された*²。

11月17日、琦善は河南省と湖北省の境界地方に向かうよう命じられる。琦善が目をかけてきた直隸提督・陳金綬*³が精兵3千を率いて、それに同行した。11月20日に、琦善は軍費〔餉銀〕200万両を与えられている（『日誌』199頁）が、後述の曾国藩の場合と較べると潤沢というほかない。12月4日、琦善は欽差大臣になった（『日誌』202頁）。琦善には急ぐ様子がなく、咸豊帝を苛立たせた。「琦善はもうとくに保定を過ぎた」*⁴と思っていたが、琦善は「賊情測りがたく、期日を延ばしていただき、改めて進攻をはかりたいと思います」*⁵などと悠長な上奏をしてくる。11月「27日に出京し、今月〔12月〕5日ようやく保定を発った。このように手綱を緩めてゆっくりしては、いつになったら河南省に到着するのか。（中略）朕は昼夜焦勞、寢食もままならない」*⁶。その後も、琦善は「正月21日に湖北省〔德安府〕応山県東旺鎮で上奏していたが、25日になってもまだそこで荷を運ぶラバを待っていた」*⁷。

咸豊2年12月4日に武漢を陥落させたあと、太平軍の洪秀全・楊秀清らは咸豊3年1月2日に船で武昌を離れた。50万と号して東に向かい、九江、安慶、池州、蕪湖などの城を陥とした（『日誌』201、208、222-225頁）。安徽省の省都・安慶は太平軍の攻撃を受けて、緊急事態に陥っていた。「〔安徽巡撫〕蔣文慶の奏報によると、河南の援兵はまだ安徽に着いていない。陳金綬は出発したのか、琦善はいつ前進するのか」*⁸と咸豊帝は焦慮する。蔣文慶は、巡撫と布政使はなお安慶省城で防守しているが、安慶省城の兵糧給与〔糧餉〕・軍服はすで

に廬州に移したので、賊が安慶に来てもし空城であり略奪はできないと上奏していた^{*9}。咸豊3年1月17日、安慶が陥落し、蔣文慶は殉節し、同年3月16日、廬州が安徽省の省城となった(『日誌』223、242頁)^{*10}。

「安徽省城は本月17日に陥落した。上奏を読み、憤懣の至りである。琦善らが早く救援に行っていれば、どうして江北でこんなことになるのか。(中略)逆匪は安慶に侵入〔竄^{*11}入〕し、必ずや流れにそって下り、まっすぐ江寧に迫る。(中略)朕は向榮に命じて直ちに江寧に救援に行かせる(中略)琦善と陳金綬は情勢をみて兵を分けて長江の南に送り応援しなければならず、絶対に坐視〔坐視不救〕してはならない」^{*12}。広西から江南まで太平軍を追撃してきた向榮^{*13}は、咸豊2年12月19日に湖北提督代理、12月26日に欽差大臣となっていた(『日誌』205、207頁)。「道光13年、直隸総督・琦善がその才を知り、転属させて教練した。累進して〔直隸省大名府〕開州協副将となった」(『清史稿』巻401、11839頁)というから、向榮も琦善が抜擢した人であった。

「琦善はいったいどこにいるのか。まさかまだ応山にいて前進していないのではあるまいな。(中略)回り道し、途中でぐずぐずしているのであれば、賊のいない地に身を隠しているのである。それが大臣の、国に対する忠義の心か」^{*14}と咸豊帝は催促する。「賊が江寧を囲むこと10日、援兵は到着しません。急がせていただきたい」という江寧將軍・祥厚らの上奏を読んで「焦急にたえない(中略)向榮と陳金綬に兵を率いて急ぎ金陵に応援に駆けつけよと何度も命じたのに、なぜ今に至るまで着かないのか」^{*15}。

結局、南京救援も間に合わなかった。咸豊3年2月11日に南京内城が陥落し、駐防旗人2万余がほとんど全滅した。2月20日、天王・洪秀全が南京水西門から入城して両江総督衙門に入って天王府とし、南京を天京と呼んで都にした(『日誌』230、235頁)。「上奏を読み、どうして憤懣にたえられようか。以前何度も、向榮と陳金綬に金陵に急ぐように命じた。はからずも、救援は間に合わず、この有様である〔一誤至此〕。(中略)琦善、陳金綬は大軍を擁していながら江南救援に間に合わなかった」^{*16}。向榮も、南京救援に間に合わなかった。「向榮は15日には蕪湖〔安徽省太平府蕪湖県〕に着いていた。江寧から遠くないのに、どうして17日に上奏したとき、まだ江寧陥落を知らないのか。(中略)すでに救援は間に合わない。憤恨させられる」^{*17}。2月22日に鎮江、翌23日には揚州が敵の手に落ちた(『日誌』236-237頁)。揚州陥落の報を受けた咸豊帝は、「憤恨の極みである(中略)琦善と陳金綬らが迅速に応援していれば、要所に拠り防ぎ止めることができたはず、どうして賊匪が揚州に侵入することがあろうか」^{*18}。「金陵〔南京〕・鎮江・揚州の三城」^{*19}は、「いつ取り戻すことができるのか、逆匪はいつ平定することができるのか。朕は実に深く焦灼する」^{*20}。

こうして南と北から、むなしく大軍を率いてきた向榮と琦善が、それぞれ南京と揚州の城外に駐留したのが江南大営と江北大営である。咸豊3年2月22日、欽差大臣・向榮が軍を率いて南京に到着、城東20里の沙子岡に結営し、まもなく孝陵衛に移った。これが江南大営である。1万人余りであった。咸豊3年3月9日、欽差大臣・琦善、幫辦軍務直隸提督・陳金綬らが揚州城外の雷塘集・帽兒墩に屯兵、約1万7、8千人、江北大営となった(『日誌』

237、240頁)。大営設営後も、向榮や琦善には戦う気がない。銀庫の正規の銀で支出できるのは僅かに22万7千両余りと知った咸豊帝は咸豊3年6月、「実に深く焦灼する。(中略) どうして有限の公金で、無窮の軍費〔軍餉〕を供することができようか。その原因を考えると、すべて、これらの大臣らが早く三城を奪還できず、金を浪費し軍を勞し、際限がないためである」*²¹。

江北の琦善らは「10日に一度上奏して責を塞ぐ」*²²のみである。咸豊帝は「朕に会わせる顔があるか、天下の人に会わせる顔があるか」*²³と琦善を叱責する。咸豊3年11月28日、琦善らは揚州に入城したが、それは空城を得たに過ぎなかった(『日誌』291頁)。太平軍は11月「26日夜間、全軍が東から瓜州に向けて逃走しました。揚城は奪還〔克復〕しました」*²⁴と琦善が上奏したが、「朕は以前、琦善は賊が全て逃げてから空城を回収〔収復〕すると言った。いま、その通りになったのに、なお九初の功を一簣に虧く〔原語は「功敗垂成」。成功一步手前でちょっとしたことで失敗すること〕と言う。無恥すでに極まれり」*²⁵。12月8日(一説では12月11日)、太平軍が揚州府儀徵県を放棄して去ったところ、琦善は「また儀徵の空城回収を上奏してきた」*²⁶。

それでも旧臣の琦善に対しては咸豊帝にも遠慮が感じられるが、向榮には憚ることなく罵声を浴びせている。向榮が「金陵到着後、実際に賊と戦ったのは鍾山、七橋甕の2回だけである。(中略)一つも真の勝ち戦はない。(中略)琦善をまねて、賊を自から逃走させて空城を回収するつもりではなかろうな」*²⁷、「汝とは顔を合わせたことはないが、汝の肺腑はとくにお見通しだ」*²⁸、「汝は広西から賊を追って江南まで来たが、徒に大軍を費やし、わずかの功もない。なお何の面目あって江北の兵を寄越してもらいたいなど言うのか。断じて許さない。どうしても江北の兵を寄越せというなら、汝の首を送ってこい」*²⁹、「汝の首を斬っても汝一人の罪を蔽うに足りない、なおのこと数省の万人の積もり積もった怒りの心を晴らすに足りない。いっとき人がいないので、汝は広西から今に至るまでの状況を知っているため、しばし首を留めているだけだ」*³⁰。

曾国藩も、咸豊4年1月に、「向營の兵・勇は5万あまり、〔咸豊3年〕3月から10月まで開戦していないという。この人は天下の大事を尽く誤り、江蘇・安徽・湖北・湖南に禍を残した。これを弾劾し、その肉を食らっても飽き足りない。今でもその勇を言うものが多いが、真理の明らかにならぬことかくのごとし、痛恨である」*³¹。管見の限り、琦善に対する罵詈は見当たらないが、曾国藩は琦善に対しても同様のことを言いたかったはずである。琦善は咸豊4年閏7月3日に軍中で亡くなった。向榮は咸豊6年5月に江南大営が潰滅したとき江蘇省鎮江府丹陽県に逃れ、同年7月9日に丹陽でこの世を去った(『日誌』336、469、478頁)。

この時期の太平軍の圧倒的優位は、船によるものであった。太平軍は、どのようにして水師を持つに至ったのだろうか。曾国藩のある上奏文に、貴州の「黔勇は山民で、水戦に慣れていません」*³²という言葉があるが、「山民」で「不習水戦」といえば、広西省金田村で決起し、山間を行軍して仲間を増やした太平天国軍も同じであった。だが彼らは、またたくまに多くの船を集めて水行し、清軍を圧倒した。楊秀清を中心とした太平軍水師の編成とその

運用については菊池秀明氏の研究^{*33}を、関連資料も含め、大いに参考にさせていただいた。李濱の『中興別記』には、

はじめ賊は長沙から西に向かうのに、寧郷から洞庭湖を迂回して、しばし常德を取って巢とするつもりであった。船があまりなく、軽々しく湖を渡ろうとしなかったのである。しかし、官軍が益陽・湘陰を防ぎ、すべての河港で商民の舟船を足止めしていたのが一朝にして悉く賊のものとなった。楊秀清は大いに喜んで、洪逆〔洪秀全〕らに言った、これは天父が賜ったものであり、天に背くのは不祥である、道筋を変えて洞庭湖に出て、岳州を取るべきであると。これより、賊は水陸相助け、ますます制止できなくなった^{*34}。

上の文中の寧郷・益陽・湘陰はいずれも湖南省長沙府の県、常德は湖南省常德府である。太平軍水師の重要人物に唐正財がいた。張德堅主編の『賊情彙纂』によれば、唐正財は

湖南〔省〕永州府祁陽県人である。年は40ばかり、体格は人並み、顔は白く口ひげがある。もともと材木商で、米も売っていた。壬子〔咸豊2年〕7月、米を載せて下流に商売に出かけた。10月、岳州で賊に遭遇し、船もろとも拉致された。楊賊〔楊秀清〕は言葉巧みに、偽官〔官側の資料なので「偽」の字が付けられている〕を与え典水匠に封ずる、その職は將軍と同じだと言ったので、ついに甘んじて賊に従った。これより前、賊は益陽で船を拉致していたが、初めはいわゆる水営はなかった。水匠の官を設けてから、賊船ははじめて統轄されるようになった。12月、賊は漢陽に拠り、武昌を破ろうとしたが、漢江の險を渉るのを恐れた。正財は浮橋をかけて洪楊諸賊〔洪秀全や楊秀清ら〕を渡らせた〔咸豊2年12月8日に太平軍は武昌・漢陽間に浮橋を造った（『日誌』203頁）〕。癸丑〔咸豊3年〕2月に江寧に着き、功により指揮に昇進した〔昇職指揮〕^{*35}。

咸豊3年1月2日、太平天国の諸王は乗船して武昌を離れた。武昌城内から出てきた庶民によると、「逆匪は城内の大砲を船に載せ、脅された男女は次々に船上に駆り立てられ、水路で去った」^{*36}。太平軍が筏と船で長江を下っていくさまは、漢口から逃げてきた商売人の話によれば、

賊は筏を用いている。船は中流を航行し、筏は岸沿いを進んでいる。上には土盛りがなされ、槍砲が周囲に配置されている。ちょうど動く城、足のある馬〔無基之城、有足之馬〕のようで、陣を結んで進んでいる。戦船はその前に行くことができず、火攻めをしても内側に届かない。また鎖で繋がれた小筏は、ひとたび敵に遇えば包囲することができる。また筏や板の上を厚く土でおおい、兩岸とつなぎ、上流の軍を遮っている^{*37}。

太平軍の水軍の強みは船の数にあった。

賊には砲船・戦船・坐船・輜重船の区別はなかった。あらゆる船に賊軍を載せ、食糧を載せ、武器・砲を載せている。全ての船が戦船で、戦闘となればすべて出動した。その江寧水営は木筏・木城を砦としていた。船の大小は揃わず訓練をしておらず、実際は戦闘ができなかった。賊はそれを知っていたので、もっぱら人や船の数によって我らに勝利した。(中略)近年、賊が長江沿いに蹂躪してもこれを防ぐ法がないのは、すべて船が多くて害を為すからである。それゆえ、賊の討伐を知るものは必ず、賊船を焼くのを一番大事な策とする^{*38}。

先述のように咸豊3年2月、南京・鎮江・揚州の三城がまたたくまに太平軍の手に落ちた。咸豊帝が、江北の陳金綬らに対して「汝らは江北で遮断攻撃することしかできず、長江を渡ることができない。もし渡る船があれば、江寧を救援すべきである」^{*39}と言っているように、長江に隔てられ、清軍は江北と江南のあいだを往来できなかった。咸豊3年7月に御史・黄経が、賊船が江面を占拠しているので、上流ですみやかに船を準備し、金陵まで下らねばならないと上奏した^{*40}。清朝には、外海水師と内河水師があった(『清史稿』巻135、3981頁)。朱東安氏によれば、外海水師は広東・福建沿海、内河水師は長江沿岸の要害に置かれていた。咸豊初年になると、外海水師はまだ存在していたが、内河水師はすでに久しく廃れており、湖北、湖南、江南〔三江〕には砲も船もなく、少数の砲船があっても民船に砲を据えただけで、実際には戦争はできなかった^{*41}。

黎庶昌撰「曾国藩年譜」によると、広東省瓊州府すなわち海南島の紅単船は大洋に出て江蘇省太倉直隸州崇明県から長江に入り、下流で賊を撃つ、広東内江の快蟹船・拖罟船は梧州府から漓水を遡り、湘江を経て長江に出て、上流下流から挟撃にするとする策が出された^{*42}。紅単船^{*43}は「もともと販油を生業としており、大洋を巡っている。その操縦の速度、砲火の精鋭、点火の習熟は、正規軍の師船〔額設師船〕の数倍以上だという」^{*44}と、咸豊帝の実録に記されている。紅単船は「波濤に慣れ、戦いに慣れて」いるが、「利によって生計を立てているので、功名で奨励するより、大きな利益を与えるほうがいい」という進言があり、「長江で賊船を爆破したら、武器・火薬・米糧は例に照らして官が没収するが、その他の財物はすべて褒美に与える」^{*45}ことになった。紅単船20隻が咸豊3年5月21日に出航し、江南に向かった^{*46}が、福建で厦門の賊を攻撃したりして^{*47}、10月になってもまだ江南に到着しない^{*48}。福建でようやく勝利すると、今度は修理が必要だといって、「実に遅い」^{*49}。快蟹船は蜈蚣のような形で砲を備え、船勇も訓練済みで「実に水戦第一の武器」であった^{*50}。「もともと内河の巡察・逮捕」用^{*51}で、清代の広東ではアヘン密貿易に用いられることが多く、太平軍の水営にも快蟹船があった^{*52}。拖罟船については不詳だが、「拖」は「ひく」、「罟」は「あみ」を意味するので、漁船の一種ではないかと思われる。

2、長沙

咸豊2年12月13日、曾国藩は、湖南省長沙府湘郷県の家で幫辦本省団練の寄諭を受けとった(『日誌』204頁)。咸豊2年8月に最初の団練大臣に任命されたのは前刑部尚書・陳孚恩であり、江西団練大臣となった。つづいて同年11月29日に曾国藩が湖南団練大臣に任命されたのである。咸豊3年2月末までに、団練大臣は合計45人に達する(朱東安『曾国藩伝』51頁)。曾国藩は、なかなか家を出ようとしなかった。喪中の身であるほかにも、理由が二つあった。軍事に不案内であること、寄付を催促する「催促捐項」のが嫌だったことである。

国藩が、局にいき諸君子のあとに続くのが遅れたのは、7月25日に訃報をきき、11月5日にはじめて喪が軽くなる「積縞素而更墨經」からである。(中略)局中の要務は、武芸の訓練と寄付金の取り立ての二つにほかならない。国藩は軍事「用兵行軍」の道はもとより素人、平時の訓練の拳法や棒術「拳經棍法不尚花法者」は、さっぱりわからない。(中略)寄付金の催促にいたっては、喪中の身であることを措くとしても、突然人の家を訪ねることはできない。たとえやってみても、国藩の若い頃の知り合いの多くは豊かな家ではない。やや資力のある者はたいてい名を知るだけで面識はない。行って寄付金を募って「勸捐」も敬遠されるだろうし、道理に合わない。こういうわけで、再三躊躇して、遅々として出ないのだ^{*53}。

だが先述のように、咸豊2年12月4日に武昌が陥落した。曾国藩は、咸豊2年12月15日夜に湖南巡撫・張亮基^{*54}の手紙を2本受け取って、「武昌失守を知り、驚きと嘆きに堪えない。郭雲仙〔郭嵩燾〕もまた15日夜にわが家に来て、省都に行って団練を幫辦するよう勧めた。湖北陥落の影響は甚大であり、長沙の人心が動揺するのをおそれる。出て行って故郷を守るべきなので、17日に家を起ち、21日に省都に着いた」^{*55}。武昌陥落が曾国藩を動かしたといえることができる。

曾国藩は後日しばしば湖北省とその省都・武昌の重要性を強調している。「湖南は武漢〔漢〕から湖を隔てるのみであり、北風が吹けば3日で着く」^{*56}。「天下の大局を論じれば、南北を通じることができる咽喉は湖北〔楚〕のみ、金陵の死命を制することができるのは湖北のみ、広東の餉道〔軍費輸送路〕を〔長江に〕転ずることができるのは湖北のみである」^{*57}。「湖北省〔鄂省〕があれば、賊が南に来て、長沙にはなお生き残る理がある。湖北省が減れば、賊が南に来なくても、長沙だけで生き残ることはできず、数か月生き延びるだけである。唇と齒のようなものだ」^{*58}、長江では荊州が上鎮、武昌が中鎮、南京が下鎮と言われるが、太平軍はすでに下鎮を手にしており、「武昌〔鄂城〕が陥ちれば、上流の荊州におよぶ。長江4000里がついにこの賊に独占されるのだ。北の兵は長江を渡って南に来ることができなくなる。両湖〔湖北・湖南〕、両広〔広東・広西〕、三江〔江南〕、閩浙〔福建・浙江〕の

兵は長江を渡って北に行くことができなくなる。上奏が上に、朝命が下に達することができなくなる」*⁵⁹、「湖北省〔鄂省〕を失えば、江西と湖南は虎狼が門庭にいるようなものである」*⁶⁰。

曾国藩は咸豊2年12月22日に次のように上奏している。湖南巡撫・張亮基の手紙で武昌が陥落したことを知り、

憤りと遺憾の思いにたえません。(中略) 皇上は寢食を忘れて南を気にかけて、どんなに焦灼されていることでしょうか。臣は不才といえども愚忠を尽くして君父のお力になろうと、17日に家を発ち、21日に省城に着き、巡撫とすべてを直接相談し、相対して泣きました。(中略) 団練については、武芸の訓練は難しくありませんが、寄付金集めが難しいです。(中略) 嘉慶年間の川楚の役〔白蓮教徒の乱〕で団練の費用を官が支給し、すべて民から取ったわけではないとは比較になりません。臣は各州県の公正な紳耆を探し求め、書信で説得し、彼らに管理させるつもりです。(中略) 現在、訓練章程を起稿していますが、明の戚繼光、近人では傅鼐の法を参考とし、精のみを求めて数を求めず、有用のみを求めて速効を求めません*⁶¹。

戚繼光(1528-1587)は倭寇との戦いで知られる明の名将、傅鼐(?-1811)は嘉慶年間に湖南省と貴州省で苗民平定にあたった人物である*⁶²。上の上奏にあるように、咸豊3年1月、曾国藩は、湖南省の士紳に向けて手紙を書いた。そのなかにあった「不要錢、不怕死〔金はいらない、死はおそれない〕」*⁶³という言葉は、「自ら誓うところであり、一時称誦された」*⁶⁴。

常大淳は、湖北巡撫から山西巡撫に異動となったが、出発前に武昌で落命した。官界の「習気」の濃い常家に曾国藩は好意を持っていなかったが、姻戚でもあり*⁶⁵、その悲運には心から同情している。下の曾国藩の手紙からは、落城時の常家の悲惨な様子が伝わってくる。

南陔先生〔常大淳〕は城門で殉節されたと聞く。その夫人、長男、一番上の孫娘は7日に殉難、次男夫妻と男女の孫はいずれも賊に連れ去られたが、幸いにそれほど凌辱されていない。3日、逆賊が下流に向かうとき、城中の男女をいっしょくたに脅して船に乗せた。長江に身を投じて自殺した者は数知れず、おそらく常氏は全滅である。惨いことだ。正月11日、湖南の張中丞〔張亮基。中丞は巡撫の別称〕が湖北にいて総督〔代理〕となり、省城を回復した。江岷樵〔江忠源〕が同行した。私は岷樵に、常氏の遺骸を収め、常氏の縁者〔孤孀〕を探すように再三頼んだ。1人か2人は見つかるかもしれない。常氏には湖北の賊中から逃げ戻ってきた家人が一人おり、これも同行させた。常氏が何の罪でこのような不測の災いにあったのか、わからない*⁶⁶。

上の文中にもあるように、湖南巡撫・張亮基は咸豊2年12月から湖広総督代理となり(『職官』1470頁)、武昌に移った。朱東安氏によれば、その後、曾国藩は「三憲」(湖南巡撫・

潘鐸、布政使・徐有壬、按察使・陶恩培)の侮りを受けた。とくに徐有壬と陶恩培の二人はひどく、咸豊3年3月に潘鐸が病気で休暇をとり、前湖南巡撫・駱秉璋がふたたび巡撫となったが、この状況は改善されなかった。「全体的に言えば駱秉璋は曾国藩集团ともっともよく息のあった地方大吏だったが、咸豊3、4年にはまだ曾国藩のやり方を理解していなかった」*⁶⁷。駱秉璋(1793-1867)、原名は俊、字は行(のちに鑑門)、広東省広州府花県の人、道光進士である。侍講学士、貴州布政使を歴任した。道光30年3月に湖南巡撫となり、咸豊2年12月からは湖北巡撫を代理していたが、咸豊3年3月に湖南巡撫代理、同年8月に実授された。咸豊10年に四川に異動となるまで湖南巡撫であり続けた。左宗棠を幕僚としたことでも知られる(『清史稿辞典』2587頁。『職官』1694-1703頁)。

曾国藩は長沙で「審案局」を設けて、土匪を厳しく取り締まった。彼の上奏によれば、「寓館に審案局を設けました。適切な委員を2人おき、匪徒を捕縛し、調べがついたら、巡撫の令旗〔軍令用の小旗〕を用いてただちに処刑します」*⁶⁸。友人たちには、「勇武・剛健・残酷〔武健嚴酷〕の名を得て、陰徳慈悲〔陰陽慈祥〕の説を損うかもしれないが、それも辞さない」*⁶⁹と覚悟を述べ、4月には「実際は3月以来50人殺しただけで、古の猛烈な者とは比べものにならない」*⁷⁰と書き送っている。曾国藩は「曾剃頭」「曾屠戸」などと呼ばれ、李瀚章*⁷¹らも心配した(朱東安『曾国藩伝』67頁)。咸豊3年9月の手紙によれば、「200人あまり殺戮」*⁷²した。この厳しい態度には理由があった。「湖南に会匪が多いことは、皆が知っています。昨年粵逆〔太平軍〕が湖南に入り、添弟会*⁷³の者は大半がこれと共に去りました。しかし残存勢力は尽きていません。このほかいわゆる串子会、紅黒会、半辺銭会、一股香会などおびただしい名称があります。(中略)東南の衡州・永州・郴州・桂陽、西南の宝慶・靖州のような山深い田舎はとくに匪徒の温床です。(中略)数十年間、殺すべきなのに殺さなかった者が積み重なり、横行するに任せ、ついに今日の大賊になったのです」*⁷⁴。

長沙でのもう一つの仕事は、軍事訓練であった。張亮基の集めた湘勇千人を「毎日訓練」し、「4、5月に兵と勇の合同演習〔会操〕をしました」*⁷⁵と曾国藩は書いている。民間から募った「勇」を訓練するとともに、正規軍である「兵」の性根を入れ替えようとしたのである。咸豊3年8月、曾国藩は、友人・江忠源に次のように訴えている。

今日の兵のことを考えるたびに、きわめて恨めしい〔傷恨〕のは、「敗不相救」の4字である。あちらの兵が出動すると、こちらの兵は目を開けても傍観、口を開いても微笑している。〔あちらの兵が〕勝つと深く妬み、褒美の銀をもらうのでは、推薦〔保奏〕されるのではと恐れる。負けても手をこまぬいて顧みず、全軍潰滅しても誰一人として、応援に出て生死存亡を救おうという者はいない。どこでもそうだと聞いている。それは次の理由による。軍を派遣するとき、この営から100、あちらの営から50〔を選ぶ〕、兵1千を集めるとなれば、数営あるいは10数営から選ぶことになる。兵と兵は馴染みがない。統率する将もまたいつもの本営の官ではない。一省のなかで動かすときもこうであり、他省に動かすときもそうである。同じ営から、今年は100人を広東〔粵〕に派遣し、

来年は50人を湖北〔楚〕に派遣する。出征の時期も違うし、行く先も遠かったり近かったり、苦楽にも差があり、一つになれない。「敗不相救」の理由の半分はこれである。また、主将が遠く離れ、命令〔令箭〕がないので助けにいかないこともある。また平日恨みがあるので、命令を受けてもわざと徘徊して〔遅回〕助けにいかないこともある。兵と勇が相遇すると、とりわけ妬み恨みが甚だしく、助けるふりをして戈を倒して勇を害し、賊がやったと隠蔽するのだ^{*76}。

咸豊3年11月にも「岳飛〔岳王〕が生き返れば弱兵の筋骨を換えられるかもしれないが、孔子が生き返っても軍〔営伍〕の習気をにわかに変えるのは難しい」^{*77}と江忠源にあてて書いている。一方、「湘勇の良い点は二つある。一つは性質がおとなしく、理で論し情で動かすことができる。一つは心をつにして互いを気かけ、軽々しく仲間を棄てたりしない。良くない点も二つある。一つは故郷を思う心が切で、長征久戦の志がない。一つは体質が弱く、労苦に耐えず、病が多い。この四点からみて、およそ本省の土匪を征伐するには適しているが、江南の粵寇〔太平軍〕を防ぐには怯懦である」としたうえで、「練勇の道は、営官が日夜従事すればしだいに熟する。鶏が卵に伏すように、丹薬を作る〔炉〕ように、片時も離れてはいけない。（中略）どの営にも文武兼備の営官が必要である」と言う^{*78}。

長沙における曾国藩の立場は難しいものだった。朱東安氏によれば、「団練大臣は地方大吏でも欽差大臣でもなく、官でも紳でもなかった。（中略）湖南には提督がおかれており、緑営の操練は提督の責任であり、巡撫には口を出す権限はなかった。曾国藩は在籍礼部侍郎幫辦団練の身分であり、当然いっそう、兵営のことに干与する権限はなかった」（朱東安『曾国藩伝』69-70頁）。曾国藩は咸豊3年9月の手紙で、張亮基に説明している。

今年、私がしてきたことの過半は越権の嫌いがあった。（中略）3と8の日に演習し、勇たちを集めて教え、繰り返し教導すること千百語、ただ庶民を騒がせないように教えたのである。4月以降、塔将〔塔齐布〕に営兵を呼ばせ、いっしょに演習させたが、これもまた弁委を呼んで、私の教語をきかせたにすぎない。毎度、下士・兵卒〔弁兵〕に講義すること、一時、数刻の長きにわたる。感化が深い〔頑石之頭〕とは言わないが、極力、ホトトギスの血を滴らせたいのである。練は名ばかりで、訓がその実である。聞くほうは楽だが、話すほうは大変である。（中略）6月初めに、提督が省都に着き、防衛部隊〔防堵〕は練兵すべきでない、盛暑に過度に労すべきでないといって、塔将をきびしく責め、清将〔清徳〕の肩をもった。中丞〔駱秉璋〕もまた私は兵事に関与すべきでないと思っていた^{*79}。

上の文中の提督とは、咸豊元年7月から咸豊4年4月まで湖南提督の任にあった鮑起豹である（『職官』2557-2560頁）。提督（従一品）は各省の緑営の最高統帥であり、提督が直接統率する軍隊は「提標」と呼ばれた（『清史稿辞典』1977頁）。長沙協副将・清徳は、当時

の緑營の墮落を象徴するような人であり、塔齊布は正反対であった。塔齊布 (1817-1855)、字は智亭、陶佳氏、鑲黃旗滿洲である。烏槍護軍から三等侍衛に昇任し、咸豊2年、太平軍が長沙を圍攻したとき、力を奮って城を守った功により、遊撃となった^{*80}。はやくも咸豊3年2月に、曾國藩は塔齊布について、「軍事がよくわかっている。すみやかにこの人を引き立てて導きたい」^{*81}と述べている。曾國藩に言わせれば、「塔將はひとり勤勞奮発、(中略)清副將は湖南の万民の許さぬところ、享樂的で仕事をしません。(中略)清は塔に大いに不満で、嫉妬と恨みが骨髓に徹していました。6月初めに提督が省都に來たので、悪口を吹き込み、何かにつけて煽り立てたのです。そこで文武不和、兵勇不睦の象が、しだいにできてしまいました」^{*82}。

咸豊3年6月12日、曾國藩は清徳を弾劾した。「安逸に耽り、訓令を守らず、演習には一度も來たことがありません。役所で暇を盗んで花木を育てています。この春、岳州から長沙に戻り、ついで常德府・澧州直隸州一帯に土匪の処罰に行きました。通った地方は賊匪に蹂躪された地なのに供応を厳しく要求し、部下に命じて、植木鉢を買わせ、船に積ませました。兵營のことや軍備はさっぱりわからず、木偶と同じです」^{*83}と上奏し、同日さらに追い打ちをかけた。「昨年9月18日に賊が<長沙で>〔< >は全集のもの〕地道を掘って南城を攻撃〔轟陷〕し、人心が動揺したとき、この將は自分で頂戴〔制帽の上端につけた等級を示す珠〕をはずして民家に隠れました。部下の兵卒が脱ぎ棄てた制服が街にあふれて、今にいたるまでお笑いぐさになっています。(中略)臣は長沙にきて半年、3と8の日には下士・兵卒を督率して校場にあつめ閱兵していますが、この將は一度も來たことがありません。実に情理に悖ります」と述べ、巡撫・駱秉璋と直接相談し、湖広總督・張亮基と手紙で相談したうえで、ともに弾劾し免職にすることを願い出るつもりだったが、それでは足りないので、革職のうえ刑部に引き渡して重く罰するよう求めている^{*84}。

清徳弾劾の同日に、曾國藩は上奏文を書いて撫標中軍參將代理だった塔齊布を推薦した。曾國藩は「一文臣を得るのは一武將を得る如かずです」と言い、「塔齊布は忠勇奮発、習勞耐苦、深く兵の心を得ています。臣は今、省都で習練していますが、この遊撃に頼って兵營を肅正しています。臣は3と8の日に閱兵していますが、この遊撃は毎日閱兵し、來ないのは10日のうち2、3日に過ぎません。下士官〔軍士〕はみな喜んで従っています」と述べて、「破格超擢」を奏請した^{*85}。朱東安氏の言葉を借りれば、塔齊布は「曾國藩に感謝感激、絶対服従」となった(朱東安『曾國藩伝』70頁)。

この6月12日以後、「兵は湘勇と不仲」になり、7月13日には鮑起豹の兵が、曾國藩の湘勇と械闘になった(『日誌』262、265頁)。「械闘」とは武器を持って集団で争闘することである。曾國藩によれば、「7月13日に、湘勇が槍を試したとき、あやまって提標の長夫を傷つけました。提標の下士・兵卒は旗を持ちラッパを吹いて、城外の校場で兵器・武器を操って湘勇と開戦しました。國藩は、勇は湘郷、長夫は常德、疑わしい〔事涉嫌疑〕と思いました。〔あやまって怪我をさせた〕勇を城に送り、直接叱責して200回の棒打ちにしました。あちらの兵のほうはお構いなしとし、己を抑えて和をはかりました」^{*86}。

だが8月4日にまた、鮑起豹が永順協兵を放任して、塔齊布が訓練していた辰勇（辰州府の勇）と械闘になった（『日誌』268頁）。「8月4日、永順兵と辰勇が、賭博のささいなことで、また旗を持ちラッパを吹いて、城壁をおりて〔下城〕開戦しました。国藩は幾度も、兵が内部で争っているのは、将来どうやって賊を防ぐのかと言っており、軍法で処罰しようとしてしました。咨文〔同級官庁間でやりとりされる公文書〕が出るとすぐ、6日夜の変があり、館室が壊され、門丁が殺傷されました。（中略）いそぎ衡州に行くことにしました」*⁸⁷。8月6日夜、湖南永順協兵が塔齊布の参将署を包囲攻撃し、その部屋を焼いた。また曾国藩の公館に行つて騒擾を起こしたので、巡撫・駱秉璋が囲みを解いてやった（『日誌』269頁）。朱東安氏によれば、弾劾された

徳清は不服で、湖南提督・鮑起豹のところに行って冤を訴えた。（中略）鮑起豹の提標兵（永順兵ともいう）と塔齊布が率いていた辰勇とが賭博で殴り合いになり、提標兵は泣き叫んで列をなし〔鳴号列隊〕、辰勇を討伐しようとした。（中略）まず塔齊布を包囲攻撃し、その部屋を壊した。塔齊布は草に隠れて幸い殺されずにすんだ。つづいてその夜のうちに、曾国藩の団練大臣公館に突入した。（中略）曾国藩は周章狼狽、駱秉璋に助けを求めるしかなかった。曾国藩の公館は湖南巡撫衙門の射場〔射圃〕のなかにあり、〔巡撫衙門との〕あいだを隔てるのは壁一つだった（朱東安『曾国藩伝』71-72頁）。

咸豊3年8月14日、曾国藩は長沙から衡州に移った（『日誌』270頁）。

3、衡州

衡州は、曾国藩にとって馴染み深い土地である。曾国藩は20歳のころ、衡陽唐氏の家塾で学んだこともある。なにより妻の欧陽氏は衡州府衡陽県の人であった。衡陽市にはいまでも曾国藩の岳父・欧陽凝祉の家が残っており、湘江東路をはさんで、すぐ目の前を湘江が流れている。衡州は長沙と違って田舎であり、「官員はもとより少なく、紳士も省都のように多く、賢くはない。ただその静けさは愛すべきで、〔自分も〕ほろを出さないで済む」*⁸⁸と曾国藩は述べている。

朱東安氏によれば、曾国藩が水師建設を始めた経緯は次のようなものであった。咸豊帝は湖北・湖南・四川に造船・練兵して水上から太平軍を攻撃するよう命じたが、駱秉璋は困難を感じて着手しなかった。その後、郭嵩燾が江忠源に砲船をつくることを建議した。江忠源はそれを重視して、湖北・湖南・四川に造船をさせ、さらに広東経由で外国製の大砲〔洋炮〕千を購入し、それによって砲船を装備して水師を建設するよう上奏した。朝廷はこれにより、咸豊3年8月に再び、湖北・湖南・四川に戦船製造を命じるとともに、広東に外国製の大型大砲500を購入してこれらの省に渡して船に据え、流れにそって下り、下流の水師と、太平軍を挟撃するよう命じた。命令が湖南に伝わり、曾国藩は駱秉璋と相談のうえ、水師創建に

着手したのである（朱東安『曾國藩伝』87頁）。

曾國藩は試行錯誤を恐れない人であった。咸豐3年9月に「いま急いで筏を造るつもりである」*⁸⁹と言っているように、衡州における水師建設は筏づくりに始まった。しかし実際に造ってみると、筏には問題が多かった。「湘江を上下するのに使えるだけで、大きな川や湖〔江湖〕では筏は小さすぎて、あまり使えません」*⁹⁰。駱秉璋にも難点を指摘されたようで、筏というものは、まさにお手紙のように「動かしたり向きを変えたりするのが鈍重である〔運掉不靈〕」が、ほかに適当な船もないので、「再三思いめぐらし、筏をつくることにした。もし使えなければ、またほかに考えなければならない」*⁹¹。咸豐3年10月7日に「筏が一隻できたので、今日試しに乗ってみた。使えるようだ」*⁹²と書いているが、実際は「7日に試してみたとき、下り〔下水〕と横渡はまだいいが、上り〔上水〕はきわめて遅かった」*⁹³。

「江蘇省〔江省〕の筏は結局どのようなものなのだ。下流にだけ行けるのか、それとも上流にも下流にも行けるのか。横・縦の寸法はどれほどか。明細を書いて詳細に教えてもらえたらありがたい。あるいは小さな竹紙〔竹の繊維で作った紙〕で模型を作り、ついでに時に衡州に送ってもらえたら、なおわかりやすい」*⁹⁴と頼んでいることから、曾國藩は筏についてほとんど何も知らずに試作していたことがわかる。結局、「私のところで造ろうとしている筏は湘江でしか使えない。大きな湖や川では、短小で大きな波を圧するのが難しい。もし大きくすれば、動きが鈍重になる」のであり、「防御には余りあり、転戦には不足」であった*⁹⁵。

筏を造ろうとしたのは、金がないからであった。後日、「私が以前、筏のことばかり言ったのは、船をやる金がないからである。民船は改造しなければならず、改造するには買わねばならない。一隻買うのに、大船なら数百両、小船でも百両はかかる。船200隻には数万両なければだめである」*⁹⁶と述べている。「筏をつくるための3千両はこちらの寄付金でつくる」*⁹⁷つもりであったが、筏はうまくいかなかったので船に切り替えた。11月、曾國藩は、後述の呉文鎔に書き送っている。

國藩は以前、衡城で筏をつくると言いましたが、湘江で砲を据えるための便宜的な計にすぎません。大きな川や湖では風や大波を御するのは難しく、激戦〔鏖戦〕に用いるには鈍重です。お手紙の指摘はきわめて適切です。近日来、私のところではもっぱら船を準備しています。すでに何度も模型をつくってみました。（中略）ただ〔広東から江南に輸送される〕途中で留めた軍費〔餉〕4万を、省城がまだ衡州に送ってくれないので、船の購入に手をつけられません。またここでは木材が不足し、職人は拙く、雨はやまず、日夜焦灼しています*⁹⁸。

朱東安氏によると、曾國藩は端午の競艇の船をまねして戦船をつくってみたが、それも失敗した。のちに岳州水師守備・成名標や広西同知・褚汝航*⁹⁹が衡州にやって来て、曾國藩は拖罟・快蟹・長龍などの船式を理解した。衡州に総廠、湘潭に分廠を設けて戦船を造っ

た。やがて江南で海防に従事したことがあり水戦船式に詳しい黄冕がやってきて、舢板船を造ることを勧めた。舢板船は短小で、軽やかで精巧、すばしこく、川が曲がったり分岐したりしているところで航行しやすく、快蟹や長龍の不足を補うことができるからであった（朱東安『曾國藩伝』88頁）。中国古来の船、とくに内河の船については、詳しい資料がなかなか見つからない。長龍船について、諸橋轍次の『大漢和辞典』は「清代、咸豊・同治の間に制した兵船の名。砲6門を載せ、傍に短槳各々8を設け、乗員は22人で、哨官が指揮する」と説明している。舢板船は福建省の「漳州地区の木造船で、船首と船底が平たい」*⁹⁹。

輜重についての計画は慎重そのもので、いかにも曾国藩らしい。

民船には石炭・米・油・塩など日用品で載せない物はなく、技芸・職人・様々な職〔雑流〕で乗せない者はありません。船は川のなかほどを進み、兩岸の陸兵が川をはさんでいきます。兵・勇は得た銀を船中の錢に両替し、その錢で船中の物を買います。そうすれば兵・勇の行くところ、米や塩が欠乏することはなく、数倍に高騰することもあります。なかで転々とまわるので、銀や錢が水陸両營から出ることはありません*¹⁰⁰。

咸豊帝に対しても、「湖北より下流の長江沿岸の市鎮は〔住民が〕逃げてしまって空っぽになり、見渡すかぎり索漠として、日用品は買えないと聞いています。臣はこのたび出征にあたり、米・塩・油・薪などを大量に貯蔵し、船に積み、水辺を兵站〔糧台〕とし、兵・勇が食に困ることがないようにしなければなりません。そうすれば敗れてばらばらになる〔潰散〕おそれがなくなります」と述べている*¹⁰¹。

曾国藩は、咸豊3年11月26日の上奏文のなかで次のように言う。「見本の船を数隻作ってみました、いずれも工匠が未熟で、規模が小さすぎるので、長江の浪を押し、巨砲の震動に耐えるものではありません。近頃、（中略）広東から絵を送ってもらった拖罟・快蟹の船式二種を細かく研究し、快蟹式に照らして新たに製造してみました。現在すでにまず10隻作りしました。さらに20-30隻作ります。（中略）拖罟船については、論旨により湖北・湖南の総督や巡撫が様式に照らして製造させたものは、武昌で造っておりますが、使えるかどうか分かりません。衡州は職人が少なく技術も稚拙で、現在まだ試作していません」*¹⁰²。

咸豊3年6月に雷以誠が揚州の仙女鎮で釐金を始めていた（『日誌』264頁）が、曾国藩にはまだこの打ち出の小槌がない。この時期の曾国藩の財源は次の二つであった。一つは、戸部から湖北・湖南に支給される船のための経費である。咸豊3年7月、咸豊帝は、「船、砲、兵・勇を準備して下流に向かい、金陵撃破を助け、賊匪が長江を往来する路を断つ」のは緊要な策であるとして、「戸部から銀20万両を出して経費とした」*¹⁰³。これは戸部の命令により広東省から運ばれることになっていたが、すぐに全額届くわけではない。咸豊3年10月24日の曾国藩の上奏によれば、「砲船を準備し水勇を招募するには、銀10万両あまりが必要です。湖南の布政使庫にはわずか3万両あまりしかなく、全く足りません。広東から江南大營に運ぶ軍費〔餉銀〕10万両余りが現在長沙に留まっており、湖北省〔鄂省〕が通れない

ために、前進できないとのことです。臣は巡撫に相談し、このうち4万両余りを留めて、砲船準備の費用にしたいと思います。不足分は、臣がなんとか寄付金を募って集めます」*¹⁰⁴。咸豊3年12月3日、曾国藩は両広総督・葉名琛に手紙を書いて、「そちらには、戸部から支出される〔部撥〕、湖北・湖南の船の経費20万両がある。以前、江南大營に運ぶ銀が、武昌の道がふさがれたため長沙に1か月余りもとめ置かれていたので、4万両を留めた。それからまた徐委員が7万両運んできた。のこりの9万両を（中略）すみやかに運んでくださるよう是非ともお願いしたい。広東一省で数省に金を出すのが誠にご苦労なことは朝廷・地方の文武で知らない者はないが、この金のほかに当てはないのだ」*¹⁰⁵。

第二の財源は、寄付金や功牌による収入である。「寄付金を募ること〔勸捐〕は、天にのほるより難しい」*¹⁰⁶、「世が小乱であれば兵の統率が金策〔籌餉〕より難しい。世が大乱であれば金策が兵の統率より難しい」*¹⁰⁷と曾国藩は嘆く。寄付金は集まらないが、功牌（軍功のあった者に与えられた一種の功労牌）は買う人がいた。「80緡銭を出した者には九品功牌を与える。しだいに160緡まで増やし、六品を与える。牌には『軍費の捻出に尽力〔助餉出力〕』と書く。昨日すでに500緡入った。これは尽きることがない。将来もし次々と来れば、数百枚刷らなければならない。巡撫のところで印を借りる。省都は広く、視界も広く、絶対にこのような良い商売はない。私がある（徐有壬）に自慢できることだ」*¹⁰⁸。「虚銜を望む者が多く、実職を望む者は少ない」*¹⁰⁹のは有り難いことであった。

咸豊3年10月には、「現在私のところでは勇を1600人養っている〔餉〕。そのうち700人は省庫から米穀〔口糧〕が支給されないの、こちらの寄付金でまかなっている。また筏や武器の製造などの費用が毎日4千あまり要る。よその寄付は極めてまれである」*¹¹⁰。11月の手紙によると、衡州の寄付金は3千両に届かず、功牌で集まったのが2千両あまりであった*¹¹¹。寄付金の強制は、「以前は絶対にしてはならないと思っていたが、いま自ら俑をつくらうとしている。実に嘆かわしい」*¹¹²と10月3日に書いている。衡陽では先述の姻戚・常家が銀千両あまりを寄付した*¹¹³が、咸豊3年12月13日の手紙では、さらに「常家の金は強制しなければだめだ。家族を捕らえなければならない。平日は妄りにこんなことはしないが、この急迫の至りになっては、もはや嫌われ怨まれるのを避けたり、日頃のようにへりくだったりしてられない。人にわかってもらうのは難しい」*¹¹⁵。

長沙府安化県の陶家にも「寄付を強制しなければならない」*¹¹⁶。安化陶家は、かつて両江総督をつとめた故・陶澍*¹¹⁷の家である。咸豊3年12月26日には「陶家は特に国の恩を受けている。義として断ることはできないはずだ」*¹¹⁸と書いていたが、咸豊4年1月6日の手紙では、「陶家は1万しか出さない。私はすでに厳しく批判して許さなかった。そのうえ、正月に5千、3月に5千と引き延ばそうとする」*¹¹⁹。「陶文毅〔陶澍〕の宦囊〔役人になって在職中に貯めた金〕は、天下の口を掩うことができようか」、道光15年には都で、彼が5万両近く餞別を送るのを見たとし、道光23年には自分は陝西にいたが、塩務の公金、銀数万両をすべて懐に収めたのを知っており、「この二事を私はひそかに非とした。往時、都で唐鏡

丈〔唐鑑〕^{*120}は数え上げて非難した。今、一文も出さない〔一毛不拔〕というのは実に許せることではない（中略）もし3万両出さなければ上奏する」^{*121}。咸豊4年1月23日の手紙では、「陶家の富を知らない者があろうか。益陽の土地からは毎年3万石があがる。1年の小作料で軍費を助けても何ということはない。御恩の最も重い家がこのように吝嗇では、どうして人から募ることができようか。もしこれほど困っていなければ、私だって、どうしてこんな大怨の種をまくだろうか」、ある家は「寄付しようとしなかったので弟を捕らえて出頭させたところ、ついに2万両出した。こんなことをすれば怨みの声がちまたにあふれるのは明らかだが、本当にどうしようもない」^{*122}。

水師には人が集まらない。水勇も将官も、希望者は極めて少なかった。太平軍に「従う者の多くは水営に入るのを喜んだ。略奪しやすく、捕まりづらいからである」^{*123}のとは対照的だった。「水勇は大砲を打つのは難しくないが、櫓で漕ぐのが難しい。水手を雇って大砲を学ばせるほうが簡単である」^{*124}。咸豊3年12月12日になっても「水師の将や下士官はまだ一人もいない」^{*125}。のちに水師の名将となる楊載福と彭玉麟は咸豊3年11月に曾国藩の軍営に來た^{*126}が、「最初陸師から水師に改めたときは、大いに言葉を費やし、曾国藩が繰り返し教導き、ようやくびくびくした〔畏難〕気持ちを消して無理に命に応じた」（朱東安『曾国藩伝』89頁）という。丸橋充拓氏は、「船の世界」のアウトロー的性格を指摘されている^{*127}。船酔いや溺死など現実的な不安のほか、「やくざ」な世界は忌避したいという感情も人々のなかに存在したのではないだろうか。

年が明けても状況は改善しない。咸豊4年1月15日、「水師の難しさは、天にのぼるより難しい。よそから呼び寄せた官員も招聘した紳士も、水勇を率いたがらない。集めた勇も、水師になりたがらない。船主〔船老板〕だけが川にいるのを承知する。いま将や兵を選んでいる暇はない、川にいるのを望みさえすれば収容する、どうしてうまくできよう」^{*128}。出征の迫る咸豊4年1月21日にも、「水師の将は選んでいるひまはない。将官は川にいたくないからである。水勇を募るのも陸勇とは全く異なる。陸路の応募者は非常に多いが、水路はいつまでたってもそろわない。だから、来る者があればすぐ収留する」、駱秉璋の「お手紙は慎重、周到詳細の道を説かれている。全くそのとおりであるが、急いでいては、どうして選ぶことができよう。ひとまず数を充たすのだ」^{*129}。

出発間際の咸豊4年1月22日には、曾国藩は次のように書いている。

湖南には従来水師がない^{*130}。このたび開闢、いばらの世界をひらくのは実に万難がある。陸路の勇にはよく、船に乗ると立っておられず、眩暈がして嘔吐するものがある。だから船を操縦する水手を招いて、立ってもふらふらしないようにしようと思う。しばらく食わせてから、徐々に教導・淘汰・追加すればうまくいく。衡郡六営副右の楊将官は、最初の点呼のときから、いかに江南に行って賊を殺すか、いかに号令が厳粛で公正か、おそれて退く者はいかに処刑されるか、一一問いただした〔問明〕ところ、勇は次々に辞めてしまい〔告退〕、一人も顧みる者はなかった。正前営の諸将官、正左営の龍将

官は、最初は勇たちに問いただしたりせず、ただ毎日食わせて、大砲の撃ち方や糧の漕ぎ方などを教えた。20日足らずで、勇たちは欣然として、いまや待ち切れんばかりに心がはやり、戦いたがっている。愚民は無知で、見たことのないもの、聞いたことのないものは天にのぼるより難しいと思う。一人が辞めると百人が附和する。その実、勇の心中には、はっきりした見解があるわけではない。百人が良いといえば、千人が声をそろえて良いというのだ^{*131}。

上の文中では、勇を「愚民」と呼んでいるが、すぐあとで述べるように、曾国藩は、俠気ある「血性男子」は身分にかかわらず熱愛し、重く用いる人である。咸豊4年1月23日になっても、「水師はまだ揃わない。陸路の勇は続々と来る。入営して練勇・長夫になろうとする者は日に数百を数える。紳士で勇を率いたい者は日に数十を数える。だが上船して水師になるよう命じると、そっぽを向く」^{*132}。

水手は、出身地を揃えるのが最善であった。水手は4千人集めなければならないが、「すべて湘郷人とし、他県のは混ぜない。同県人は、容易に心を合わせることが出来るからである」^{*133}。胡維峰、胡楚峰の二人を雇った。この二人については、咸豊4年1月9日、水師について頼りにしていた褚汝航への手紙で、「〔湘〕潭で船を買った胡維峰は、商売場の人であり、義侠心があり、率直で廉潔、われらのなかにはなかなかいない。私はこれを重んじ、正後営官にする。またその同族の胡楚峰を副後営官にする。(中略)閣下は水戦に詳しいが、湘郷の水勇とは言葉が通じず、情が通じない。二胡〔胡維峰と胡楚峰〕は水勇の気習をよく知っているが、水師の演習や水辺での迎撃〔水次接仗〕はさっぱりわからない。(中略)閣下は二胡の兵営に数人を派遣して水戦を教え、規律を説明する。また堯階〔朱堯階。湘郷県人。曾国藩の若いころからの友人〕に湘郷人を数人推薦してもらって閣下の兵営に入れて、言語を通じ情を通じるとよい」^{*134}。

曾国藩が褚汝航を重用したのは、彼が広東人を扱うことができたことも大きな理由であった。褚汝航は「水師を熟知し、おそらく広東・広西の人を使い慣れてもいる」^{*135}と曾国藩は言う。広東人を恐れる人が多かったが、その背景の一つは「潮勇」(福建省との境に位置する広東省潮州府の勇)の乱暴狼藉だと考えられる。たとえば咸豊3年正月に曾国藩が湖南の紳士に寄付を呼びかけた手紙(先述)にも、潮勇の姦淫・略奪をにくむあまり、太平軍のほうがましだと言う人がいると書かれている^{*136}。また、砲船を専門とする広西右江道・張敬修が砲、職人〔艚匠〕、水勇2千人とともに湖南省に来るというので、曾国藩は衡州に留めるつもりだった^{*137}が、よく考えてみると、「張道の連れてくる2千の水勇はすべて広東人であり、剽悍・凶猛で、手なづけるのは難しいです。国藩の現在の地位、平日の声望では、絶対に彼らをおさえる〔彈圧〕に足りません」^{*138}。

咸豊4年1月18日、曾国藩は「広兵が楚勇に教えようとしても、言葉が通じない。(中略)広兵に湘勇の制服〔号褂〕を着せて、湘勇の米〔口糧〕を、あちら〔広兵〕の毎日7分に加えて1銭2分として、意気投合させたい。だがあちらもまたこちらの服を着て、こちらの言

葉を使うのは望まない」*¹³⁹と苦心していたが、1月23日に、思わぬ事態が起こってしまった。「23日の変を知った。あやうく閣下〔褚汝航〕が辱めを受けるところだった。広兵と広勇が大勢に殴られた。実に痛恨である」*¹⁴⁰。駱秉璋への手紙では、

褚太守〔褚汝航。太守は知府の別称〕は頭脳明敏で実行力があり、水師のことをよく知っている。(中略)水師の教練は彼に任せていた。彼もまた喜んで精鋭な軍隊に訓練できると思っていた。23日、水勇が戒め〔約束〕に不服で、太守がこれを責めた。勇たちはどよめいて騒ぎを起こし、広東から連れて来た兵・勇を大勢で殴ったのである。負傷者10人あまり、そのうち2人は重傷で、助かるかどうかかわからない。太守は、勇を率いる仕事を辞したいと言ってきた。情勢はいたるところで順調でなく、こんなことになってしまった。現在湘潭では招集しても集まらず、訓練は停止した。非常に焦灼である。もとより才能が足りず、天も味方してくれない〔天事多不相湊合〕。湘潭に着いたら、自分でこれ〔水師のこと〕をしなければならぬ。湖北が援軍をまつこと急迫している。あともう一息だった、この水軍を捨てて、陸勇だけつれて行くことはできない。ちょっと湘潭に留まって昼夜自ら招練し、船の物品を自ら監督・処理しなければならない。友の多くは自分でなんでもすべきでないと伝えてくれ、先輩方もまた人に任せよと戒めてくださるが、實際上、ここに来る官紳はいずれも水勇を率いたがらない。褚守は率いることを望んだし、その能力もあったが、殴打事件がおこり、その長所を発揮しきれなかった。私は自分でやりたくはないが、どうしてそれが可能だろうか*¹⁴¹。

もう一つ、広東・広西から到着が待たれるのが砲であった。国内で鑄造された大砲は、二、三千斤の大砲であっても、数百斤の外国製の砲〔洋砲〕の射程に及ばず、炸裂の危険もあると考えた曾国藩は、大金を惜しまず、広東から大量の砲を買うことにしたのであった(朱東安『曾国藩』88頁)。咸豊3年8月、両広総督・葉名琛らに、外国の砲〔夷砲〕を「千あまり購入して3か月以内に武昌に送り、船に据えよ」*¹⁴²との命が出された。咸豊3年11月26日の上奏で、曾国藩は、広西右江道・張敬脩が外国の砲と広東の砲〔夷砲、広砲〕千と職人を湖南に運んで来て、はじめて安徽救援に出発できると述べている*¹⁴³。咸豊3年12月21日の上奏では、「出発は、張敬脩が湖南まで砲を運んでくるのを待たなければなりません。張敬脩が広東で砲を千あまり購入し、10回に分けて湖南に運んで来ます。現在最初のものがすでに衡州に着きましたが、僅か80、その後の9回はなお消息がありません」*¹⁴⁴。咸豊4年1月6日、ようやく「張道が衡州に到着した」が、張は張でも「嶮屏〔字であろう〕であり、徳圍ではない。徳圍道員は葉制軍〔葉名琛。制軍は総督の別称〕が上奏して本任に留めた」*¹⁴⁵と聞いた。私が急望するのは砲であり、道員や水勇ではない。11月23日に安徽救援の命を奉じ、正月末には2か月たつ。砲が到着しなくても出発するしかない。目下、焦るのは、砲が揃わず水勇が訓練できていないという二つのみだが、実にどうしようもない。すべて揃うのを待っていては、出発の日は永遠に来ない」*¹⁴⁶。

4、呉文鎔の死

咸豊3年9月、湖広総督・呉文鎔が武昌に到着する。呉文鎔(1792-1854)、字は甄甫、江蘇省揚州府儀徵県人、嘉慶進士、編修となる。翰林院侍読学士、詹事、内閣学士、礼部侍郎、刑部侍郎兼署戸部侍郎などを歴任したあと、地方に転じた。道光19年に福建巡撫、道光20年に湖北巡撫、道光21年に江西巡撫、道光28年に浙江巡撫、道光30年に雲貴総督、さらに咸豊2年に閩浙総督に任命されるが着任しないまま、咸豊3年に湖広総督となった(『清史稿辞典』794頁。『職官』1469-1471、1683-1694頁)。浙江巡撫時代には江忠源、雲貴総督時代には胡林翼の才を見出し、向榮の無能も見抜いていた^{*147}。人を見る目があったことがわかる。

呉文鎔は曾国藩の会試の総裁官であった。雲貴総督から湖広総督への赴任途上で長沙を通ったとき、呉文鎔は曾国藩を招いている(『日誌』276頁)。朱東安氏は、「呉文鎔は湖広総督、曾国藩の師であり、また強力な後ろ盾であった。もし呉文鎔がいれば、(中略)のちにそのような政治的苦境に陥らなかったかもしれない」(朱東安『曾国藩伝』93頁)と述べるが、二人はそれまで親しかったわけではない。「私は甄師〔呉文鎔〕の門生であるが、従来書簡のやりとりは非常に稀だった。ここ2、3か月は船や砲の相談で、書簡の往復が多くなった。その大局観〔規劃大局〕には定見があり、船の寸法、砲の重さ、人物の能力〔生熟〕を何度も相談したが、ややもすれば千言を越え、憂国の心が紙上にほとばしり、敬服に堪えない。過労のために体を壊さないかとひそかに案じている」^{*148}。

呉文鎔は「〔9月〕7日に長沙を起ち、14日に武昌〔鄂城〕に着いた。人にも地にも不慣れで、巡撫・布政使も共に謀るに足りない」^{*149}と曾国藩は危惧していた。当時、湖北省の巡撫と布政使はともに満洲であり、湖北巡撫は崇綸、湖北布政使は岳興阿であった(『職官』1919、1697頁)。崇綸(?-1854)、喜塔腊氏、正黄旗満洲、内閣貼写中書から軍機章京となり、侍読学士に昇任した。陝西鳳邠道、直隸永定河道、雲南按察使、広東布政使を歴任し、咸豊2年、湖北巡撫に昇任した(『清史稿辞典』1742頁)。

湖北学政・青麐が後に述べたところによれば、咸豊3年「9月に賊が田家鎮から上流にやってきて、武昌が戒嚴となったとき、城を守る兵はわずか2千名あまりでした。総督・呉文鎔はまだ道中にありましたが、この知らせを聞くや、単騎で昼夜兼行、急ぎ省都に到着、ただちに手配して完璧でした」^{*150}。青麐(?-1854)、閩門氏、字は墨卿、正白旗満洲である。道光進士で、内閣学士、戸部侍郎、礼部侍郎を歴任し、咸豊3年2月から湖北学政をつとめていた(『清史稿辞典』901頁。『職官』2725頁)。湖広総督代理だった張亮基は山東巡撫の任につくため咸豊3年9月16日に武昌を離れた(『日誌』276頁)が、「引き継ぎの日、夜陰に乗じて長江を渡り、別れも告げずに去った〔不辭而行〕」^{*151}と呉文鎔が上奏している。張亮基は一刻もはやく危地を逃れたかったのであろう。咸豊3年9月18日に漢口と漢陽が陥落したが、武昌は守られた(『日誌』276頁)。呉文鎔は武昌に着くと「すぐ城楼に住み、すで

に3か月を超えようとする。夜はいつも着物を着たまふ仮寝をし、帯を解かないと聞く。焦灼の情は手紙にみえ、嘆息の音が聞こえるようである」*¹⁵²と12月に曾国藩は書いている。

この間の事情は、咸豊3年11月28日に呉文鎔が上奏文につけた「片」（「片」については注154を参照）に詳しい。この「片」は、緊迫した情勢を伝え、真情を吐露した達意の名文だと思う。

臣は9月15日に公印を引き継ぎました。16日に巡撫・崇綸が臣の役所に来て、現在城内は住民が避難して空っぽであり、堅守するのは難しい、城外に駐屯したほうがよい、まだ一戦できるなどと言いました。臣はそれは良くないと思い、再三そう言いましたが、承諾は得られませんでした。17日、臣は巡撫の役所に行って、またこの話をし、すでに文武各員に、ここで皆で評議すると伝達したと言いました。その後、文武各員にたずねましたが、いずれもそれで良いと言いました。臣は到着してまだ2、3日、あらゆる状況をよく知りません。どうして己の意見に固執することができましょう。脱稿して上奏しました。そのとき臣は皆に言いました。もし10日、半月の後に援兵が集まれば勝利することができるので、城を出て駐屯してよい。もし3、5日以内、援兵が集まらないうちに賊船が来れば、やはり閉城堅守〔城を閉ざして堅守〕する、この上奏を盾に取って城を棄てて顧みないということとはできない、と。皆もはいはいと言いました。あにはからんや、18日丑刻〔午前2時頃〕、賊船が城からわずか30里のところにいるという知らせがありました。臣は急ぎ巡撫と文武各員を役所に呼び、登陲守城〔城壁に登って城を防衛する〕の相談をしようとしたしましたが、夜明けになっても誰一人来ませんでした。臣は馬に乗って巡撫の役所に向かいましたが、途中で臣の軍の中軍*¹⁵³に遇うと、巡撫の命により、城外の長春観にお集まりいただきたい、巡撫と文武は城を出て駐屯すると報告されました。臣はこれを聞いてすっかり肝を潰しました。急ぎ巡撫の役所に行くと、幸い文武はまだ解散していませんでした。臣は色をなして〔微色発声〕、今は閉城堅守あるのみ、城を出て駐屯する道理はないと言いました。巡撫はなおしきりに論駁して、この空城を守って何になる、おまえは殉節の美名を博したいだけだ、大臣を喪い国体を傷つけても構わないのだ云々と言いました。臣は突然悟りました。巡撫が城を出て駐屯したいのは、機に乗じて逃げ出し、もともと城外にいたことを口実にして、城池失陥の罪を免れただけなのです。臣は怒りで胸が一杯になり、目をいからせて大声で叫びました。今は城存与存、城亡与亡〔城あらばともにあり、城滅びればともに死ぬ〕の8字あるのみだ、異議ある者は斬り捨てる、と。衆議は初めて止み、巡撫もどうしようもなく、憤然と、城壁に登れと言うなら登るさ、と言いました。これが登陲堅守の実情です。巡撫は城壁の上で駐守しましたが、毎日2回の食事は必ず役所に戻りました。食事のためではなく、実は役所で人目を避けてアヘンを吸うためでした*¹⁵⁴。

武昌包圍などの知らせに接して「実に深く焦灼」*¹⁵⁵した咸豊帝は、咸豊3年10月3、5、

15日と三度にわたり、曾国藩に、湖北救援に向かうよう命じた（『日誌』278、279、280頁）。だが、曾国藩は動けなかった。水師がなかったからである。咸豊3年10月4日、「はるかに先生のことを思うと、恐れと申し訳なさ〔仄〕が増すのみです」*¹⁵⁶と呉文鎔に書き送っている。「3千を武昌〔鄂〕に行かせても川を前にして嘆くのみで、どうしようもない。しかしいまどこに使える水師があるのか。陸路で援け、一城を固く守れるようにするしかない」*¹⁵⁷、「漢陽は一水を隔てるのみだが、飛んで渡って賊を追い払うこともできない。私が行っても何の益があるのか、私がいなくとも何の損があるのか」*¹⁵⁸と、駱秉璋への手紙も苦悩に満ちている。

幸い、武昌はことなきを得た。咸豊3年10月24日、曾国藩は次のように上奏した。「賊船は10月5日以降、陸続と下流に向けて出航し、近頃はすべて下流に行った、漢陽の府県はすでに取り戻し、江面は肅清、武昌は解嚴などと聞いています。これによって、湖北〔鄂〕救援の軍はやや延期できます。（中略）現在、湖北・湖南〔両湖地方〕には戦艦にできる船は一艘もなく、水師に慣れた兵卒は一人もありません。いまでも勇を率いて湖北省〔鄂省〕に赴いても、そこにはすでに賊はいません。もし下流に急げば、賊は水をもって去り、我は陸をもって追ひ、これと相遇することはありません。（中略）再三考えて、やはり船を準備するのが第一の先務であります。臣は現在衡州に駐在し、衡城で急ぎ試行しています。（中略）水師の準備に目鼻がつけば、すぐに上奏し、臣が自ら率いて下流に向かいます」*¹⁵⁹。

咸豊3年11月上旬、呉文鎔は、「賊はすでに下流に向かい、武漢の江面には賊船はありません。（中略）現在、賊匪は安徽省を占拠しています」*¹⁶⁰と上奏している。今度は安徽省の省都・廬州が急を告げていた。11月9日の駱秉璋への手紙を見ると、曾国藩はずいぶん気持ち弱っている。「近頃、きわめて悩みが深いが、どうにか持ちこたえている」と書いて、曾国藩は4つの悩み、3つの不安を訴えている*¹⁶¹。駱秉璋は4つの悩みに丁寧な答えてやったらしく、曾国藩はいたく感謝している。「感服、感服。私は根が狭小、京師の親友がしばしばいましめてくれ、自分でも錬磨したが、ついに病根を除くことができない。恥じ入るばかりだ」*¹⁶²。この感謝の手紙は「咸豊3年11月15日亥刻」に書かれているが、11月19日、11月22日、11月23日、11月26日酉刻、11月28日巳刻、と三日にあげず駱秉璋に手紙を送っている。駱秉璋も筆まめな人である*¹⁶³。都にいたときと同様、曾国藩は反省が好きである。「国藩はもともと狭量なので、明末の君子を鑑としている。国が減びそうなときになっても〔朝局敗壞將尽〕、なお意地を張り合っていた〔競意氣〕のは嘲笑うべきことだ。これをもって自戒している」*¹⁶⁴。

11月12日、曾国藩は今度は安徽救援に向かうよう命じられる（『日誌』284頁）。咸豊帝は、10月24日の曾国藩の上奏文の言葉を借りて、「すでに目鼻がついたことと思う」と述べて、「現在、安徽の逆匪は猖獗をきわめ、桐城と舒城を続けて陥とし、廬州に迫っている。（中略）安徽省の情勢は非常に急迫している。（中略）いそぎ船と砲を整え、以前に集めた楚勇6千を該侍郎〔曾国藩〕が率いて、洞庭湖から長江に入り、流れにそって東下し、まっすぐ安徽の江面に赴き、江忠源と合流して水陸夾撃し、安慶および桐城・舒城などの城を回収し、賊

匪が北に向かう路を牽制せよ」*¹⁶⁵。

江忠源は浙江省秀水県の知県だったとき親の死で帰郷したが、咸豊元年に、太平軍征討にあたっていた賽尚阿により桂林に呼ばれ「疏調」、故郷で「楚勇」を募った。咸豊2年4月に袁衣渡で太平軍を破ったのは有名である。咸豊2年に知府に抜擢され、咸豊3年1月には候補道から湖北按察使、同年3月には江南で幫辦軍務、咸豊3年9月に安徽巡撫に任じられた。江忠源は10月18日に湖北から安徽に向かい、11月10日に廬州に到着していた*¹⁶⁶。咸豊3年11月18日、曾国藩は、江忠源に次のように書き送った。江忠源の弟・江忠濬を千名の勇とともに安徽に先行させるが、

その他の5千は、船と砲が揃ってから水陸併進させる。(中略) 3年は帰らずの覚悟で百戦艱難の途につくのだから、どうしていい加減に軍を編制して、慌ただしく出発することができようか。人はことごとく烏合、武器の多くは粗悪である。船は200に満たず、砲は500に満たず、大海の豆、顔のホクロのようなものだ。たとえすみやかに安徽省〔皖省〕に着けたとしても、いったい何の役に立つというのか。

そして、江忠源を力づけようとしてか、安徽省のめぼしい人士の名を挙げたあと、「官場では岱雲〔陳源兗〕のほか、袁午橋〔袁甲三〕がもっとも頼りになり〔結実〕、才気も大事を総括するに足る」と書いている*¹⁶⁷。

咸豊3年12月16日、廬州府が陥落し、安徽巡撫・江忠源、候補知府・陳源兗らが亡くなった(『日誌』295頁)。曾国藩はかつて都で、江忠源は「必ずや天下に功名を立てるが、節義を以て死ぬだろう」と言った*¹⁶⁸が、そのとおりになってしまった。「江忠源が死んだのは、曾国藩の両手を切ったに異ならず、兵を率いるのが不得手なことを知りながら、自ら出征せざるをえなくなった」(朱東安『曾国藩伝』92-93頁)と朱東安氏は言う。曾国藩は、咸豊4年1月15日に駱秉璋に苦しい胸の内を語っている。13日夜に、「岷樵〔江忠源〕が殉難したことを知った。極めて憂鬱である。私が規模を大きく、条理を明らかにしようとしたのは、この人に渡そうと思っていたからである。彼を総帥として、私が協力〔参酌〕すれば、あるいは少しは足しになるかもしれないと思っていた。いまかの人が亡くなった。私の気力〔精神〕・才能・度量・閱歴では総帥にはなれない、いたずらに虚名を得るだけである」*¹⁶⁹。同じく廬州で死んだ陳源兗は、曾国藩の親友であり、姻戚でもあった*¹⁷⁰。

咸豊3年11月なかば、湖北省では「黄州がもっとも警急」*¹⁷¹となっていた。崇綸と青麐は、呉文鎔を黄州に進軍させようとした。咸豊3年11月16日、崇綸は持病のため休暇を願い出る*¹⁷²が、同じ日に、呉文鎔に何度も派兵を勧めたが決して従わず、船と砲が揃い大軍が集まってから兵を出すといって終日「閉城坐守、一籌莫展〔城を閉ざして動かず、無策である〕」と上奏した*¹⁷³。青麐も、現在、逆匪は黄州一帯におり、「武昌には官兵が2万近くいるのに、呉文鎔らは有用の兵を無賊の地に擁して株守一隅を知るのみ、湖北省の全局、天下の大局はお構いなしです」と糾弾し、咸豊帝は咸豊3年12月2日、呉文鎔はただちに兵を

率いて武昌を出よ、「もう断じて引き延ばしてはならない」、省城の防衛は崇綸がせよと命じた^{*174}。

呉文鎔は黔勇〔貴州省の勇〕を率いて来るよう胡林翼を呼び寄せたところであり、曾國藩の水師とも挟撃を約しており、両軍を待って大挙、賊を滅ぼすつもりだったが、「崇綸はしばしばこれに噛み付き〔齟〕、戦を促すことますます急であった。文鎔は非常に憤って言った、『私は厚く国の恩を受けており、どうして死を惜しもうか。将卒を選び訓練して、貴州と湖南の軍が来たら挟撃して勝利をおさめようと願っていたが、待てなくなった』」（『清史稿』巻396、11789頁）。咸豊3年11月28日、呉文鎔は先に一部を引用した「片」を書いた。この「片」とそれに付けられた咸豊帝の硃批からは、崇綸に対する呉文鎔の憤懣と、咸豊帝の冷たい反応がよく伝わってくるので、その続きを少々長く引用する。

城壁に登ってから、事ごとに臣と齟齬がありました。軍は和が大事であり、総督と巡撫が仲違いすれば必ず事を誤りますので、すべて丸く収め、それほど大事でないことには敢えて異議を唱えませんでした。絶対にだめなことは極力制止しました。たとえば、荊州將軍・台湧を撤兵・帰營させようとしたことです。荊州もまた緊要ですが、巡撫は〔台湧を〕武昌に返したく、再三、臣に言いましたので、臣は再三阻止しました。巡撫はついに臣に相談なく、文書〔咨函〕を出して、台湧を武昌に来るよう促しました。そして、すでに緑營の精兵7、8千人を巴河〔黃州の下流40里。同資料集、378頁〕に討賊に派遣したと偽ったのです。影も形もないことを公文に書いたのです。軍務を児戯と見ており、臣は実に恐懼にたえません。幸いに皇上は聖明で、現在の情勢をお察しくださった^{*175}ので、台湧が兵を率いて武昌に来ることはありませんが、巡撫はなお上奏して動かさなければならぬと言います。現在、賊は黃州に集まっていますから、もちろん兵・勇は派遣すべきです。陸路からは行方を探って機会を伺って攻撃しますが、水路は船と砲が揃わず、水勇は集まらず、しばし待つしかありません。しかし巡撫はいまこのとき民船数百隻を雇い、兵5、6千を派遣し、水陸並進すると言います。現在城を防衛する兵はせいぜい5、6千人、民船の舵取りや水手はひとたび賊と戦うと聞けば、必ずや続々と退避してしまいます。時に望んで必ず事を誤ります。〔巡撫は〕このような紋切り型のことを言うだけで、時勢を見て可能かどうか考えることをしません。臣は再三制止して、大いにその意に逆らったので、現在、すべきこと、上奏すべきことに、巡撫は連署〔列銜〕しなくなりました。

伏して思いますに、皇上は寢食を忘れて焦勞なさっており、臣にできるのは丸く収めて事機を誤らないようにすることだけです。どうして煩瑣な下情で煩わせることができましょう。いかんせん、巡撫は浮薄で悪賢く頑なです。いま賊が省内におり〔在境〕、間髪を入れません。臣は虚心に怒りをおさめ事々に助け合おうとしましたが、できないこと、してはならないことには、絶対にいい加減に同意することはできません。しかし巡撫は己が正しいと言い張り、一つの城のなかで、それぞれがそれぞれの仕事をしてい

ます。もし将来に過ちを残せば、誰が罪〔咎〕を負うのでしょうか（硃批：汝等二人、罪〔咎〕は同じである）。何度も思い悩み、事実に基づいて君父の前に直陳せざるをえません。

臣は才能・見識が乏しく足りず、軍隊のことはさらに未熟です。どうして自分が正しく、行動が正しいと言えましょうか。ただ皇上の天恩を懇願します。臣をただちに罷免し（硃批：激昂詭弁〔負気詭辞〕、無恥すでに極まれり、大胆すでに極まれり）、別に重臣を任命して湖北〔楚〕に来させるか、あるいはまずは巡撫に総督を兼任させて職務を統一して責任をもたせ、封疆に誤りを残さないようにしてください。臣は深い御恩を受けており、すべて投げ出してもそれにこたえることはできません。どうして退いて安逸を求めることができましょうか。天恩を懇願します。仕事をお与えください。どこの大営で文案を助けることになっても、至誠を尽くし、尽力に努めます。（後略）

そして資料集の注には、上の「臣をただちに罷免し…封疆に誤りを残さないようにしてください」という部分の横に朱線があると記されている^{*176}。

その後、武昌防衛の兵が少なくなってしまうし、軍費〔餉項〕も不足なので、しばらくは兵を率いて武昌を出る必要はないと崇綸が言い出したが、呉文鎔は、省城防衛の兵・勇は足りると思うので、やはり武昌を出て督戦する、と咸豊3年12月7日に上奏した^{*177}。崇綸は武昌の守りが手薄になるのが恐くなったのであろう。呉文鎔は、咸豊3年12月9日に黃州に向けて進軍した（『日誌』294頁）。崇綸は12月10日に、呉文鎔は軍費〔餉〕や兵が何とかなって〔輾轉〕から行くべきだと上奏した^{*178}。咸豊帝もさすがに、「崇綸は以前は呉文鎔は閉城坐守と弾劾していた」のに、「どうして矛盾しているのか。大いに奇異に思う」として、やはり呉文鎔を黃州に行かせた^{*179}。だが咸豊3年12月26日に崇綸が省城の防衛兵が少ないと上奏すると、咸豊4年1月4日の硃批は、「呉文鎔は省都を出るにあたり多くの兵を擁し、省都という要地を顧みないのは、大局が分からず軽重を知らず、自分の命を地方より重視しているのである。すみやかに呉文鎔に旨を伝え、彼が率いている兵・勇を適宜撤退させ、根本を固めさせよ。さらに、この原摺と硃批を送って読ませよ。朕はどうして崇綸一人を守るために計ろうか、実に省都〔鄂省〕の民の命のためである」^{*180}と、呉文鎔に厳しかった。

曾國藩は再三、省城を出ないように呉文鎔に忠告していた。呉文鎔が武昌を出る直前、咸豊3年12月4日の手紙では、「湖南省と湖北省はどちらも省都堅守を主としており、軽々しく剿〔討伐の意〕の一字を口にする必要はありません。船が揃い広東の砲が届くのを待ち、正月の末に水陸併進、順風順水してこそ進攻〔進剿〕を語ることができます。これは國藩と先生だけが意見がぴったり合っているところです。湖南省の同僚の多くは、國藩がどうして急いで進攻しないのか責めます。湖北省にもこうした議論があると聞きます」^{*181}。咸豊3年12月15日、曾國藩は、崇綸が上奏して呉文鎔を弾劾したのは「まことに不可解」^{*182}だと書いている。呉文鎔にあてて、「厳しい旨で責められようとも、先生は適切に徹底的に述べるべきです。（中略）逐一申し述べれば、応諾されます。たとえ叱責されても、先生の忠実と

正直、事を謀る能力は公明に天下に明らかになります」*¹⁸³。

咸豊帝の硃批は、かつて宮崎市定氏が紹介された雍正帝のそれに似て、罵詈雑言に満ちているが、曾国藩は屈しない。たとえば曾国藩は咸豊3年11月26日に、安徽省のことは極めて心配ではあるが、来春にならないと出発はできないと答えるとともに、「数省合防」、「四省合防」を語った。咸豊帝は腹をたてたのか、「現在、安徽省が救援を待つこと急である。もし己の意見に偏執すれば、あまりに遅い。(中略) 汝の上奏をみると、数省の軍務に一身で当たることができるようだが、汝の才能でできるのか。日頃うぬぼれて「漫自矜誇」、己の右に出る者はないとしている。事に臨んで、果たして全てその言葉どおりなら良い。もし少しでも慌てたら、天下の物笑いにならずにいられようか」*¹⁸⁴と厳しい硃批をつけた。

呉文鎔なら慄然としたかもしれないが、曾国藩は負けない。「12月16日に朱批を奉じました。(中略) 聖諭諄諄、懇切丁寧、臣の臆病「不事畏葸」を教え諭し、臣のうぬぼれを案じて厳しく懲戒してくださいました」と懇慫に述べたあと、砲は足りず、長江は賊が支配しているので安徽に着けるかどうか分からない、複数の省が合力防堵するというのは駱秉璋、江忠源、呉文鎔が自分への手紙のなかで言ったことであり、自分の才能ではもとより無理だと思う、自分が訓練した勇は現在土匪を討伐しており、すぐに動かすことはできない、餉は乏しく兵は少ない、とすぐに出発できない理由を縷々述べたあと、

自ら思うに、才智浅薄、愚誠敢えて死を避けないのみです。ことの成否「成敗利鈍」については、恃みになるものは何一つありません。皇上がもし臣に成果を迫るなら、臣は恐懼して身の置き所がありません。将来一つも功績なく、大言で君を欺いた罪を受けるくらいなら、いま実情に基づいて申し述べ、おそれて進まない「畏葸不前」罪を受けるほうがましです。臣は武事に疎く、家で喪を全うすること「在籍終制」ができずに士林の嘲りを受けています。さらに大言を以て事を壊しては天下の物笑いになります。どういう顔をして天地のあいだにいられましょうか。夜半焦思して痛哭あるのみです。

この上奏に咸豊帝は、「わかった。成否はもとより予測できない。しかし汝の心には天に誓ってやましいことがないのを知っているのは、朕一人ではない。怯懦「畏葸」の罪を甘受するのは大いに宜しくない」*¹⁸⁵という硃批をつけた。曾国藩が恐懼した様子を見せて、それならやめると、やんわり咸豊帝を脅して成功したようにも見えるが、朱東安氏によると、曾国藩は感激して涙を流して10倍の努力で出征準備をし、後年もこのことを忘れず、わざわざ人に頼んで都から自分の上奏の写しをもらい、咸豊帝の朱諭とともに保存したという(朱東安『曾国藩伝』92頁)。

曾国藩はつらいとき、駱秉璋に心情をきいてもらう。咸豊3年12月24日の手紙に、呉文鎔の「このたびの出征は、まことに心配である。応援に飛んでいきたいが、新船は揃わず水勇を集めるのはまことに難しい。水勇を率いるのに頼りになる者は一人もいない。昨日、今日とまた大雨で何もできず、本当に気が滅入る」*¹⁸⁶。咸豊4年1月7日にも、呉文鎔は武昌

を出た後、ついに手紙が来ないと書き、呉文鎔について、「まことに賢者だが気概〔意気〕がない。また人に信用されない。理由がわからない。（中略）近頃は大雨が止まず、造船所は起工できない。焦灼万状、諸事なぜこのように順調でないのか」*187。

呉文鎔は咸豊4年1月1日に黄州から堵城に進駐し、同年1月15日に自殺した（『日誌』296、298頁）。曾國藩は兵營が破られたと聞いて、「焦りで居ても立ってもいられない。もし本当なら、甄師〔呉文鎔〕は危うい。崇公とは事を共にできない〔崇公共事、恐難合也〕」*188。咸豊4年1月18日、崇綸は、呉文鎔は「兵に守られ、騾馬に乗って靈沙河一路に避難した。新洲あるいは麻城県まで退いたという説もある」と上奏した*189。だが、逃げたというのは事実でなかった。呉文鎔の死を確認した咸豊帝により、「総督陣亡例に照らして優遇して恩典を賜る。任内の一切の処分は悉く取り消せ」*190との命が出された。咸豊4年1月21日、咸豊帝は青麐に、二人はどうして不和になったのか、崇綸はアヘンを吸うのか上奏せよと命じた*191。青麐の返事は、呉文鎔は堅守を志し、巡撫・崇綸は兵を率いて城を出て敵を迎え撃てと呉文鎔に迫り、自身は城に残ろうとしたので意見が合わなかった、崇綸がアヘンを吸うのは「前から聞いていました。隠し立てはいたしません」と答えた*192。咸豊4年2月25日、礼部右侍郎・青麐は湖北学政から湖北巡撫に改められ、丁憂湖北巡撫・崇綸は辞職のうえ湖北に留まり防剿に協力すること〔開缺暫留湖北協同辦理防剿事宜〕とされた*193が、咸豊4年5月、「病氣と称して城に残った〔留防託病〕」ことにより崇綸は罷免された*194。

咸豊4年6月2日、太平軍により、武昌は陥落した（『日誌』324-325頁）。湖北巡撫・青麐は「武勝門を出て督戦した。城中に突然火がおこり、土匪が内応し、兵は尽く潰れ、ついに陥落した。青麐は首をつろうとしたが、人々がこれを擁して長沙に向かい、その後荊州に行った」（『清史稿』巻397、11799頁）。青麐は咸豊4年6月18日に長沙に着き、その後荊州に行き、同年7月15日に処刑された。曾國藩は咸豊4年8月23日に武昌を奪還した（『日誌』327、332、345-346頁）。曾國藩は同年9月27日に前任督撫の優劣を上奏した。それによると、武昌で訊ねたところ、「官吏・武人・紳庶いずれも武漢が再び陥落したのは、実に崇綸と台湧〔満洲。咸豊4年2月に荊州將軍から湖広總督になる。同年6月16日に罷免〕のやり方が悪く、誤りが多かったためで、庶民は恨み骨髓であると言っています。一方、前總督・呉文鎔の忠勤憂国、殉難甚烈を口を極めて称え、官民は今でもこれを思っています。前巡撫・青麐に対しても哀れむ言葉が多く、怨恨の言葉はありません」として、以前のことにふれる。

呉文鎔は昨年9月15日に武昌〔鄂〕に着きました。卯刻〔午前6時頃〕に接印、未刻〔午後2時頃〕に田家鎮敗北の知らせを聞きました。全城が逃げ出して空っぽになり、官弁はあわてふためき、人心はばらばらでした。呉文鎔は属僚を呼び集めて死守を誓いました。即日、保安門の城樓に移居し、身邊には一僕一馬のみ、書吏・幕賓も、親兵・夫役もなく、昼夜書類を処理し、帶も解かないこと2、3か月に及びました。これにより人心は落ち着き、敗残兵は集まり、賊兵は下流に退き、武昌を犯しませんでした。

崇綸は呉文鎔を、「役所の書齋にこもり、城を閉じて株守した〔安坐衙齋、閉城株守〕と弾劾したが、「実際は、前総督は日夜城楼に住んでいたものであり、片刻たりとも役所の書齋にいたことなどありませんでした」。呉文鎔は、曾国藩の水師ができて湖北に来てはじめて共に進攻することが可能だと考えていたが、「崇綸はさっぱりわからず、いつも船・砲はすでに揃ったと言って、総督は恐れて〔畏蒞〕出ないと譏りました。呉文鎔はもとより剛直、怯懦〔畏蒞〕を深く恥としていましたので、発憤して出征しました」。そして「呉文鎔が殉難したことは全省の軍民が知っているのに、崇綸は行方不明と入奏しました。生前に排斥したのみならず、死後にも中傷しました」。さらに、衡州に使いを寄こして、曾国藩に湖北〔鄂〕の救援に向かうよう促した^{*195}が、そのとき「呉文鎔の公文書〔咨文〕を偽造し、布政司印を借用し、公文書には黄州の賊勢が猖獗だと言うのみで、堵城がすでに敗れたこと、総督がすでに亡くなったことは書いてありませんでした」。それは「呉文鎔が殉難できなかったと言っているにほかならず、節義を誣告し、終始妬んで害し、まことにどういう心をしているのかわかりません」。

曾国藩は9月21日に黄州に着き、22日に堵城に行って、呉文鎔の霊を祭り、住民に詳しく尋ねたところ、「呉総督は兵営に来てから、深さ数尺の雨泥のなか、毎日各営を巡邏し、士卒を激励したということです。正月15日、賊が兵営4営をつぶす〔踏〕のをみて、こと終われり〔事不可為〕と知り、雪泥のなかを北に向かって九叩し、痛哭し、大声で、聖朝に顔向けできないと言って、水〔塘水〕に身を投げて死にました」。呉文鎔の死後、青麐が軍務を補佐〔幫辦〕したが、崇綸は青麐ともことごとくに衝突して妨害したので、武昌陥落後に青麐が長沙に来たとき、崇綸の様々な掣肘や台湧の坐視不救を語り、「痛恨に胸を叩き、怒りでまなじりが裂けんばかり」でしたが、これを青麐は上奏したでしょうかと曾国藩は咸豊帝にたずねる。

6月2日に武昌が陥落したとき、「崇綸は多くの軍とともに逃げ出し、転々と生き延びています。免職帰京となったので、〔陥落の〕一日前にすでに武昌を出ていたと称して、転奏を申請しています。封疆大臣たるもの、在官であろうとなかろうと国難に殉ずるのが本分ですが、死ななくても、はっきりそう言えば良いのです。どうして月日を偽って、城破れて逃げて生き延びた罪を隠す必要がありましょうか。人を弾劾するときは、死んでもなおこれを誣告します。自分については、生きながらえても隠蔽しようとしします。なんと無恥もはなはだしいことでしょうか」。この上奏文には、「別に旨がある」との硃批が付いた^{*196}。咸豊4年10月11日、崇綸は武昌陥落のさいに荊州に逃げ、現在は陝西で治療しているというが、北京に護送して刑部に引き渡せという上諭が内閣に出された^{*197}。その後、「崇綸は陝西省の仮住まいで病死」と上奏された^{*198}が、「服毒自殺」だったという（『清史稿』巻397、11800頁）。後日談はここで終わる。

咸豊4年1月28日、曾国藩は湘勇を率いて衡州を発ち、「討粵匪檄」を発した（『日誌』300-301頁）。咸豊4年2月2日に、曾国藩は次のように上奏している。

臣が準備した船は拖罟1隻、快蟹10隻、長龍50隻、三板艇^{*199}150隻、いずれも広東戦艦の様式によっています。また釣鈎船120隻を改造し、輜重船100隻あまりを雇いました。配備した砲は、広西から借用したもの150、広東で買ったものは昨年届いた80、今年届いた240、本省で用意したのは100あまりです。募集した勇は、陸路5千人あまり、水師5千人です。(中略)陸路はすでに長期にわたって習練しており、やや使えると思いますが、水路は非常に急いで招集したので、まだ恃みになりません。準備した兵站〔糧台〕は、米1万2千石、石炭1万8千石、塩4万斤、油3万斤、軍で必要な器物・職人はすべて携帯・随行します。陸路の長夫・随丁、水路の雇船・水手、兵站の文武の官吏〔員弁〕・夫役、あわせて全軍約1万7千人です^{*200}。

咸豊帝は、いま水路の進攻は専ら湖南の砲船が頼りだ^{*201}と言いながら、「曾国藩が一人で大軍を統率するのは、実に心配」なので、呉文鎔の死後、湖広総督となっていた台湾(満洲)に、曾国藩と力を合わせよと命じている^{*202}。

曾国藩は咸豊4年2月に、自分の率いる軍には毎月餉銀8万両が必要だとして、湖南・江西・四川で寄付金集め〔勸捐〕を高官にまかせてほしい、郭嵩燾に湖南の寄付金集めをさせてほしいと上奏する^{*203}が、その前に、郭嵩燾に厳しい手紙を書いた。この手紙には曾国藩の覚悟が披瀝されている。咸豊元年に「丁憂の候補知県」だった江忠源が悲憤慷慨して従軍した^{*204}というのに、君は翰林で、軍事で編修に抜擢されながら保身にはしていると責め、

近日朋輩の多くがこれは国藩一人の私事だと考えて、友を死なせたくないと言う〔有不宜許友以死之説〕。おかしいことだ〔可怪笑〕。私は死ぬまでやる〔一死久矣〕。友人たちが私を棄てて顧みなくても、笑って死ぬ。友人たちが命がけで助けようとしても、私を救えるとはかぎらない。足下のような者にはおのずから君臣の義があり、名教の責任がある。尽力して国に報いるべきである。私の生き死にで判断すべきでなく、己の生き死にで判断すべきである。私がまだ死んでいなければ、私を助けて共にやろう。私がすでに死んでいれば、独力で支える、あるいは人とともにやる、君の命が尽きるときまでやるのだ。(中略)霞仙〔劉蓉〕から手紙がきた。もともと遠くに行きたくなかったが、岷樵〔江忠源〕の死を知り、快く〔慨然〕、私とともに長征することにしたと力説している。27、28日に湘潭に着いて私を待つという^{*205}。

おわりに

湖南省の湘郷で服喪中だった曾国藩は、団練に尽力せよとの命を受けて故郷を後にした。省都・長沙に到着後、審案局を設けて匪徒を厳しく取りしまった。同時に、塔齊布らの協力を得て、兵・勇の訓練に励んだが、緑營の激しい反発にあった。曾国藩は衡州に移り、水師創建に尽力した。咸豊4年1月末にようやく出陣に漕ぎ着けたが、盟友の江忠源、師の呉文

鎔、いずれの救援にも間に合わなかった。この時期の史料からは満官と漢官のあいだの軋轢が伝わってくる。琦善と、彼の息のかかった陳金綬や向榮を重用して失策を重ねたこと、崇綸を重用して呉文鎔を死に至らしめたこと、いずれも朝廷による満官偏重の結果であった。

その後の情況に少しだけふれておきたい。呉文鎔の遺産の一つは、胡林翼を貴州から湖北に呼び寄せたことであり、武昌は咸豊3年12月、咸豊4年6月、咸豊5年2月と「三陷」するが、咸豊5年3月に胡林翼が湖北巡撫代理（咸豊6年11月に実授）になり（『日誌』201、294、324-325、382、384、512頁）、情勢が変化する。満洲のなかでは、漢人を重視する文慶や肅順といった人物が台頭する。また、咸豊4年2月の実録には、「貴人那拉氏を昇格させて懿嬪に封じる」^{*206}という記述がある。実録にこうした記載があるのは珍しいが、のちの慈禧太后（西太后）である。

-
- *1 孫文良・董守義主編『清史稿辞典』山東教育出版社、2008年、1907、1936頁。以下、『清史稿辞典』と略記する。趙爾巽等撰『清史稿』中華書局、2003年、巻370、11502頁。以下、『清史稿』と略記する。錢実甫編『清代職官年表』中華書局、1997年、1467-1469頁。以下、『職官』と略記する。雷炳炎『清代社会八旗貴族世家勢力研究』中国社会科学出版社、2016年、83頁。琦善の審問で、当時刑部侍郎を代理していた曾國藩が原則を譲らなかった件については、浅沼かおり「京官時代の曾國藩」『共立国際研究』第40号（2023年）25頁を参照。
 - *2 郭廷以『太平天国史事日誌』台湾商務印書館、中華民國65年、198、202頁。以下、『日誌』と略記する。咸豊2年12月24日、欽差大臣・琦善に都統銜を与え、専ら軍務をおこない、河南巡撫代理にはおよばないとした（『日誌』206頁）。
 - *3 陳金綬（?-1856）は四川省順慶府岳池県人、嘉慶3年（1798）、兵卒〔行伍〕として白蓮教討伐に加わり、把総となった。功を重ねて都司にいたる。道光年間に、遊撃、副将、総兵、直隸提督を歴任し、琦善とともに軍を率いて太平軍の鎮圧にあたった（『清史稿辞典』1885頁）。道光13年（1833）、直隸総督だった琦善により調司教練、累擢されて督標中軍副将となり、琦善に信頼〔倚用〕された（澹泊主編『中国名人志』第12巻、清朝（下）、中国檔案出版社、2001年、1185頁）。
 - *4 『文宗顯皇帝実録（1）』（『清実録』40）巻78（咸豊2年12月上）己卯條、1030頁。以下、実録について「中華書局、1986年」は省略する。
 - *5 『文宗顯皇帝実録（1）』（『清実録』40）巻79（咸豊2年12月中）丙戌條、1041頁。
 - *6 『文宗顯皇帝実録（1）』（『清実録』40）巻79（咸豊2年12月中）丁亥條、1042-1043頁。
 - *7 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻83（咸豊3年正月下）乙亥條、66頁。
 - *8 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻82（咸豊3年正月中）甲子條、36頁。
 - *9 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻83（咸豊3年正月下）丁卯條、46頁。
 - *10 「廬州は地勢の優れた地、要所に拠り〔扼要宅中〕、省都たるにたえる。安慶は長江の水辺で卑しく狭く取るに足らぬ。改めたのは良いことだ」（『復彭洋中』（咸豊3年11月2日）『曾國藩全集』書信（一）岳麓書社、1995年、329頁）と曾國藩は述べている。以下、『曾國藩全集』について「岳麓書社、1995年」は省略する。
 - *11 「竄」には、こそこそ逃げるという意味があり、太平軍に対する軽蔑が込められている。以下も原文には「竄」と書かれていることは多いが、とくに記さない。
 - *12 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻83（咸豊3年正月下）甲戌條、63頁。

- *13 向榮（1792-1856）、字は欣然、四川省夔州府大寧県（現在の重慶市巫溪县）人、兵卒〔行伍〕出身である。河南白蓮教、湖南新寧李沅発の起義を鎮圧し、正定鎮総兵となる。道光27年に四川提督、道光30年に湖南提督、陝西提督、さらに広西提督、咸豊3年には湖北提督となる（『清史稿辞典』642頁。『職官』2554-2559頁）。
- *14 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻84（咸豊3年2月上）甲申條、90頁。
- *15 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻85（咸豊3年2月中）己丑條、98頁。
- *16 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻85（咸豊3年2月中）壬辰條、107頁。
- *17 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻86（咸豊3年2月下）己亥條、122頁。
- *18 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻87（咸豊3年3月上）乙巳條、136頁。
- *19 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻91（咸豊3年4月中）壬辰條、240頁。
- *20 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻98（咸豊3年6月下）戊戌條、417頁。
- *21 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻97（咸豊3年6月中）己丑條、392頁。
- *22 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻107（咸豊3年9月下）甲子條、627頁。
- *23 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻111（咸豊3年11月上）丁未條、727頁。
- *24 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻114（咸豊3年12月上）甲戌條、786頁。
- *25 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻114（咸豊3年12月上）甲戌條、788頁。
- *26 『日誌』298頁。『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻115（咸豊3年12月中）戊子條、817頁。
- *27 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻114（咸豊3年12月上）乙亥條、790-791頁。
- *28 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻114（咸豊3年12月上）乙亥條、794頁。
- *29 『文宗顯皇帝実録（3）』（『清実録』42）巻117（咸豊4年正月上）癸卯條、6頁。
- *30 『文宗顯皇帝実録（3）』（『清実録』42）巻119（咸豊4年正月下）己巳條、54-55頁。
- *31 「復駱秉璋」（咸豊3年12月13日亥刻）『曾國藩全集』書信（一）408頁。
- *32 「留胡林翼黔勇會剿片」（咸豊4年2月15日）『曾國藩全集』奏稿（一）106頁。
- *33 菊池秀明『金田から南京へ—太平天国初期史研究—』汲古書院、2013年、277、346-347、357-358、374、377頁。
- *34 李濱譯「中興別記」巻4、太平天国歴史博物館編『太平天国資料匯編』第2冊上冊、中華書局、1979年、62頁。この資料集の説明によれば、「中興別記」（61巻）は、官・私の材料200種あまりを採録し編年体を用いて書かれた、道光16年3月から同治3年9月までの記録である。
- *35 「偽殿前丞相左五指揮唐正財」（巻2、劇賊姓名下）「賊情彙纂」中国史学会主編『太平天国』（中国近代史資料叢刊）第3巻、上海人民出版社・上海書店出版社、2000年、69頁。張德堅は咸豊3年から「賊情」の記載を始め、翌年11月に曾國藩の命を受けて『賊情彙纂』を編輯した（「校本賊情彙纂題記」同書、25頁）。
- *36 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻81（咸豊3年正月上）癸丑條、11頁。
- *37 「周天爵奏報探聞敵情請用北省勁旅防守黄河兩岸片」（咸豊3年正月13日）（録副）中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』社会科学文献出版社、1992年、第4冊、405頁。以下、この史料集を『鎮圧檔案史料』と略記する。菊池秀明氏の前掲書（397頁）の邦訳を参考にさせていただいた。
- *38 「水營」（巻5、偽軍制下）前掲「賊情彙纂」141-142頁。
- *39 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻85（咸豊3年2月中）戊子條、98頁。
- *40 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻99（咸豊3年7月上）庚戌條、445頁。
- *41 朱東安『曾國藩伝』百花文芸出版社、2000年、87頁。朱東安氏は「内河水師」を「内江水師」と表記している。以下、朱東安『曾國藩伝』と略記する。

- *42 黎庶昌撰、李瀚章審定、梅季校点「曾国藩年譜」(黎庶昌・王定安等編撰、李瀚章・李鴻章審訂『曾国藩年譜(附事略・榮哀祿)』岳麓書社、2017年)巻2、27頁。以下、黎庶昌撰「曾国藩年譜」と略記する。
- *43 紅単船とは広東商船で、その名は商人が船を造ると海関に報告し、赤い書付〔紅単〕をもらって検査に備えたことに由来する。道光・咸豊年間に南海を広範に航海していた最上の〔頭号〕運輸大帆船である。大きさは2種類あり、三十万大は長さ8.5丈・幅2丈、五十万大は長さ10丈・幅2.5丈であった。紅単船は運航が敏捷で、甲板が広く、大砲〔火炮〕を設置するのに向いていた。大きいものは30あまり、小さいものでも20余りの砲を設置することができた。清軍は、これを「水師中でもっとも敏捷なもの」とみていた(中国航海博物館、王煜、葉冲編著『中国古船録』上海交通大学出版社、2020年、203-204頁)。
- *44 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻89(咸豊3年3月下)辛未條、199頁。
- *45 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻105(咸豊3年9月上)乙巳條、576頁。
- *46 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻97(咸豊3年6月中)癸未條、403頁。
- *47 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻103(咸豊3年8月中)辛卯條、542頁。
- *48 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻108(咸豊3年10月上)庚辰條、669頁。
- *49 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻110(咸豊3年10月下)丙申條、705頁。
- *50 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻103(咸豊3年8月中)丙戌條、527頁。
- *51 『文宗顯皇帝実録 (2)』(『清実録』41)巻87(咸豊3年3月上)癸丑條、158頁。
- *52 前掲『中国古船録』239頁。
- *53 「与劉蓉」(咸豊2年10月)『曾国藩全集』書信(一)91-92頁。
- *54 張亮基(1809-1871)、字は石卿、江蘇省徐州府銅山県人。道光挙人。内閣中書、侍読となる。知府となり、雲南按察使、布政使を経て、咸豊2年に湖南巡撫となる(『清史稿辞典』1838頁。『職官』1696頁)。
- *55 「致欧陽秉鈺」(咸豊2年12月25日)『曾国藩全集』書信(一)96頁。
- *56 「与嚴正基」(咸豊3年9月25日)『曾国藩全集』書信(一)245頁。
- *57 「与駱秉璋」(咸豊3年10月13日三更)『曾国藩全集』書信(一)285頁。
- *58 「与駱秉璋」(咸豊3年10月初5日四更)『曾国藩全集』書信(一)268頁。
- *59 「与王鑫」(咸豊3年10月初8日三更)『曾国藩全集』書信(一)274頁。
- *60 「与夏廷樾」(咸豊3年10月初9日)『曾国藩全集』書信(一)277頁。
- *61 「敬陳团練查匪大概規模摺」(咸豊2年12月22日)『曾国藩全集』奏稿(一)40-41頁。
- *62 『清史稿辞典』1706、2030頁。『清史稿』巻361、11386-11390頁。
- *63 「与湖南各州県公正紳耆書」(咸豊3年正月)『曾国藩全集』書信(一)104頁。
- *64 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻2、24頁。
- *65 常家との縁組に曾国藩は反対していた(前掲、拙稿、20頁)が、常家を親戚と呼んでいる(「与駱秉璋」(咸豊3年9月29日三更)『曾国藩全集』書信(一)259頁)ので、弟の家が常家と婚姻を結んだと思われる。
- *66 「致欧陽秉鈺」(咸豊3年正月12日)『曾国藩全集』書信(一)100頁。武漢陥落のとき、曾国藩の友人・馮卓懷も危ういところだった。常大淳のところに泊まっていたが、「11月6日に倉皇として武昌を逃れ、長江を渡って北上したと知った。数日ならずして賊は漢陽を陥とし、またいくばくもせずして武昌を陥とした」(「与馮卓懷」(咸豊3年正月)『曾国藩全集』書信(一)112頁)。
- *67 朱東安『曾国藩伝』69頁。趙烈文撰、廖承良標点整理『能静居日記』(咸豊11年8月21日)岳麓書社、2013年、365頁。

- *68 「拿匪正法並現在幫辦防堵摺」(咸豐3年6月12日)『曾國藩全集』奏稿(一)56頁。
- *69 「与徐玉山」(咸豐3年2月)『曾國藩全集』書信(一)128-129頁。
- *70 「与陳源沅」(咸豐3年4月16日)『曾國藩全集』書信(一)152頁。
- *71 李瀚章(?-1899)、字は筱泉、安徽省廬州府合肥県人、李鴻章の兄である。己酉(道光29年)の朝考で選拔され、曾國藩の門下に出た。咸豐3年、湖南省長沙府益陽縣の知県代理をつとめていた。曾國藩につかえて湘軍の軍餉を主理した(『清史稿辞典』765頁。黎庶昌撰「曾國藩年譜」巻2、26頁)。
- *72 「与呉文鎔」(咸豐3年9月初6日)『曾國藩全集』書信(一)202頁。
- *73 「関帝会というのは昔の添弟会であり、紅巾をかぶっている」(「与張亮基」(咸豐3年5月)『曾國藩全集』書信(一)171頁)。
- *74 「嚴辦土匪以靖地方摺」(咸豐3年2月12日)『曾國藩全集』奏稿(一)44頁。
- *75 「与呉文鎔」(咸豐3年9月初6日)『曾國藩全集』書信(一)202頁。
- *76 「与江忠源」(咸豐3年8月30日)『曾國藩全集』書信(一)192頁。
- *77 「復江忠源」(咸豐3年11月18日)『曾國藩全集』書信(一)366頁。
- *78 「復劉蓉」(咸豐3年11月初1日)『曾國藩全集』書信(一)326-327頁。
- *79 「与張亮基」(咸豐3年9月重陽日)『曾國藩全集』書信(一)208-209頁。
- *80 官は湖南提督に至る。咸豐5年、軍で病死した(『清史稿辞典』1910頁)。
- *81 「復欧陽兆熊」(咸豐3年2月)『曾國藩全集』書信(一)134頁。
- *82 「与呉文鎔」(咸豐3年9月初6日)『曾國藩全集』書信(一)202頁。
- *83 「特參長沙協副將清德摺」(咸豐3年6月12日)『曾國藩全集』奏稿(一)59頁。
- *84 「請將長沙協副將清德交刑部治罪片」(咸豐3年6月12日)『曾國藩全集』奏稿(一)60頁。
- *85 「保參將塔齊布千總諸殿元摺」(咸豐3年6月12日)『曾國藩全集』奏稿(一)61頁。塔齊布は太平軍との戦いで活躍し、曾國藩の力となる。曾國藩はそれを忘れず、同治7年に上京したとき、塔齊布の遺族を訪ねている(『曾國藩全集』日記(三)同治7年12月19日、1587頁)。
- *86 「与呉文鎔」(咸豐3年9月初6日)『曾國藩全集』書信(一)202頁。
- *87 「与呉文鎔」(咸豐3年9月初6日)『曾國藩全集』書信(一)200-203頁。
- *88 「与周子儼」(咸豐3年9月初10日)『曾國藩全集』書信(一)214頁。
- *89 「与駱秉璋」(咸豐3年9月27日戌刻)『曾國藩全集』書信(一)252頁。
- *90 「与呉文鎔」(咸豐3年10月初4日)『曾國藩全集』書信(一)266頁。
- *91 「与駱秉璋」(咸豐3年10月初4日三更)『曾國藩全集』書信(一)267頁。
- *92 「与駱秉璋」(咸豐3年10月初7日三更)『曾國藩全集』書信(一)270頁。
- *93 「与駱秉璋」(咸豐3年10月16日三更)『曾國藩全集』書信(一)293頁。
- *94 「与夏廷樾」(咸豐3年10月初9日)『曾國藩全集』書信(一)278頁。
- *95 「与駱秉璋」(咸豐3年10月11日二更)『曾國藩全集』書信(一)282頁。
- *96 「与駱秉璋」(咸豐3年10月21日三更)『曾國藩全集』書信(一)305頁。
- *97 「与徐有壬」(咸豐3年10月初10日)『曾國藩全集』書信(一)279頁。
- *98 「復呉文鎔」(咸豐3年11月初10日三更)『曾國藩全集』書信(一)350頁。
- *99 前掲『中国古船録』307頁。
- *100 「復呉文鎔」(咸豐3年11月初10日三更)『曾國藩全集』書信(一)350頁。
- *101 「請提用湖南漕米片」(咸豐3年11月26日)『曾國藩全集』奏稿(一)83頁。
- *102 「籌備水陸各勇赴皖会剿俟粵省解炮到楚可成行摺」(咸豐3年11月26日)『曾國藩全集』奏稿(一)81頁。
- *103 『文宗顯皇帝実録(2)』(『清実録』41)巻100(咸豐3年7月中)辛酉條、473頁。

- *104 「請截留粵餉籌備炮船片」(咸豊3年10月24日)『曾国藩全集』奏稿(一)78頁。
- *105 「与葉名琛」(咸豊3年12月初3日)『曾国藩全集』書信(一)391頁。
- *106 「復朱孫貽」(咸豊3年11月初10日)『曾国藩全集』書信(一)348頁。
- *107 「復夏廷樾」(咸豊4年正月20日)『曾国藩全集』書信(一)467頁。
- *108 「与徐有壬」(咸豊3年9月16日)『曾国藩全集』書信(一)222頁。
- *109 「請捐輸歸入籌餉新例片」(咸豊3年11月26日)『曾国藩全集』奏稿(一)84頁。
- *110 「与劉蓉王鑫」(咸豊3年10月20日)『曾国藩全集』書信(一)300頁。
- *111 「復駱秉璋」(咸豊3年11月初5日)『曾国藩全集』書信(一)336頁。
- *112 「与駱秉璋」(咸豊3年10月初3日亥刻)『曾国藩全集』書信(一)263頁。
- *113 「与駱秉璋」(咸豊3年9月29日三更)『曾国藩全集』書信(一)259頁。
- *114 「復駱秉璋」(咸豊3年12月13日亥刻)『曾国藩全集』書信(一)408頁。
- *115 「復駱秉璋」(咸豊4年正月初6日亥刻)『曾国藩全集』書信(一)435頁。
- *116 「復駱秉璋」(咸豊3年12月13日亥刻)『曾国藩全集』書信(一)408頁。
- *117 陶澍(1779-1839)、字は子霖、湖南省長沙府安化県人、嘉慶進士、翰林院編修。のちに御史、給事中、山西按察使、安徽布政使、巡撫などを歴任した。道光10年、两江総督となり、太子少保銜を加えられ、塩政を兼管した。海運を督辦し、兩淮塩務を整理し、多くの功績を挙げた。諡は文毅である(『清史稿辞典』1900頁)。陶家に加担していたのは左宗棠であった。「中堂が最初、命を受けて団〔練〕を運営するようになったとき、富裕な名士〔紳富〕たちから寄付を募った。陶の息子の少雲〔陶枕〕に錢1万緡を出させようとしたが、左が庇護して出させなかったので、〔中堂は〕激怒した」と、のちに曾国藩の幕僚・趙烈文は記している(前掲『能静居日記』同治3年3月3日、748頁)。
- *118 「復夏廷樾」(咸豊3年12月26日)『曾国藩全集』書信(一)425頁。
- *119 「復駱秉璋」(咸豊4年正月初6日亥刻)『曾国藩全集』書信(一)435頁。
- *120 唐鑑(1778-1861)、字は鏡海、湖南省長沙府善化県人、嘉慶進士、庶吉士、檢討。山西按察使、浙江布政使、江寧布政使、太常寺卿などを歴任。惠績、直声あり、琦善や耆英らを弾劾した。のちに金陵書院の主講をつとめた(『清史稿辞典』1578頁)。
- *121 「復郭嵩燾」(咸豊4年正月20日)『曾国藩全集』書信(一)469-470頁。
- *122 「復駱秉璋」(咸豊4年正月23日)『曾国藩全集』書信(一)477頁。
- *123 「水営」(卷五、偽軍制下)前掲『賊情彙纂』141頁。
- *124 「復駱秉璋」(咸豊3年11月11日)『曾国藩全集』書信(一)353頁。
- *125 「復徐有壬」(咸豊3年12月12日)『曾国藩全集』書信(一)405頁。
- *126 黎庶昌撰『曾国藩年譜』卷2、30-31頁。弟の曾国葆が二人の才をほめたので、曾国藩は二人を用いた(同書、卷2、31頁)。
- *127 「民衆反乱が大運河や長江の流域という水運の動脈上、すなわち『船の世界』で数多く起きていることにも注目したい。このような流通上の要地には、故郷からこぼれ出て、根無し草になったアウトローたちがたくさん雇われていた。つまり、東方や南方は『一君万民体制と相性の悪い人びと』の溜まり場になりやすかったのである」(丸橋充拓『江南の発展 南宋まで』岩波新書、2020年、xvi頁)。
- *128 「復駱秉璋」(咸豊4年正月15日)『曾国藩全集』書信(一)456頁。
- *129 「復駱秉璋」(咸豊4年正月21日)『曾国藩全集』書信(一)471頁。
- *130 『清史稿』には「湖南水師」について、「清初に辰州・洞庭の2営が設けられたが、康熙28年に、辰州水師が廃され、岳州水師営が設けられた。(中略)雍正から嘉慶にかけてしばしば増減があり、

頭舵戦兵34人、水歩戦兵39人、水守兵142人、戦船18艘が残存した。嘉慶2年に（中略）洞庭協が水師營となり（中略）戦兵109人、守兵436人、戦船12隻、分防小船・游巡小船各10艘（中略）太平が続いたので、将・下士・兵卒〔将弁兵丁〕すべて陸地に居住し、船が老朽しても修理せず、旧制は次第に廃れた」（巻135、4021頁）と記されている。

- *131 「復褚汝航」（咸豊4年正月22日）『曾国藩全集』書信（一）475頁。
- *132 「復駱秉璋」（咸豊4年正月23日）『曾国藩全集』書信（一）477頁。
- *133 「復朱芑」（咸豊3年12月14日巳刻）『曾国藩全集』書信（一）409頁。
- *134 「復褚汝航」（咸豊4年正月初9日）『曾国藩全集』書信（一）442頁。褚汝航（?-1854）、字は一帆、江蘇省蘇州府呉县人。道光28年、布政使経歴を捐職、広西に派遣される。太平軍との戦いで、しばしば戦功をたて、知州、同知、知府、道員、塩運使などを歴任した。曾国藩の招き〔檄調〕に応じて湖南に至り、戦艦を督造し、水軍を訓練した。褚汝航は国藩に重んじられた。咸豊4年に戦死すると、曾国藩は痛惜した（『清史稿辞典』2266頁。『清史稿』巻490、13559頁）。
- *135 「復褚汝航」（咸豊3年12月26日）『曾国藩全集』書信（一）427頁。
- *136 「与湖南各州县公正紳耆書」（咸豊3年正月）『曾国藩全集』書信（一）103頁。
- *137 「復呉文鎔」（咸豊3年11月初10日三更）『曾国藩全集』書信（一）350頁。
- *138 「復呉文鎔」（咸豊3年11月12日三更）『曾国藩全集』書信（一）354頁。
- *139 「復褚汝航」（咸豊4年正月18日）『曾国藩全集』書信（一）463頁。
- *140 「復褚汝航」（咸豊4年正月25日）『曾国藩全集』書信（一）483頁。
- *141 「復駱秉璋」（咸豊4年正月26夜三更）『曾国藩全集』書信（一）484頁。
- *142 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻103（咸豊3年8月中）甲申條、521頁。
- *143 「籌備水陸各勇赴院会剿俟粵省解炮到楚乃可成行摺」（咸豊3年11月26日）『曾国藩全集』奏稿（一）80-81頁。『日誌』288頁。
- *144 「瀝陳現辦情形摺」（咸豊3年12月21日）『曾国藩全集』奏稿（一）87頁。
- *145 広西右江道・張敬修は広西の匪賊討伐のため湖南に行かず本任に戻されることになった（『文宗顯皇帝実録（3）』（『清実録』42）巻119（咸豊4年正月下）乙丑條、43頁）。実録には、張敬修でなく張敬修と記されている。
- *146 「復駱秉璋」（咸豊4年正月初6日亥刻）『曾国藩全集』書信（一）434-435頁。
- *147 道光28年に浙江巡撫になったが、そのとき秀水県の知県だったのが江忠源で、呉文鎔は諸事頼りにしていたが、親の死により去った。呉文鎔は、「江知県のような賢者を、親の死に帰さないことができようか」と嘆いた。雲貴総督のときには太平軍が勢いを増すなか「上奏して、提督・向榮は功を驕り病と称しています。軍事を誤るといけませんので、〔別に〕大将の器量を詔選すべきです」と論じる一方、貴州省黎平府の知府・胡林翼が団練をし土匪を討伐するのを上奏推薦した（『清史稿』巻396、11788頁）。
- *148 「復駱秉璋」（咸豊3年12月15日亥刻）『曾国藩全集』書信（一）413頁。
- *149 「与嚴正基」（咸豊3年9月25日）『曾国藩全集』書信（一）245頁。
- *150 「青麤奏報督臣呉文鎔於黃州進剿尽節情形片」（咸豊4年2月初4日）（録副）『鎮江檔案史料』第12冊、1994年、423頁。
- *151 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻111（咸豊3年11月上）癸卯條、718-719頁。
- *152 「復倉景愉」（咸豊3年12月初9日）『曾国藩全集』書信（一）402頁。
- *153 原文は「臣標中軍」。総督・呉文鎔のいう「臣標」すなわち「督標」は総督が直接統轄する緑営軍隊。兵を率いる権限をもつ文武官員のもとには、印を管理し、兵營の業務を統括し、号令を伝える首領官がおり、それを「中軍」と称した（朱金甫・張書才主編、李国栄副主編『清代典章制度辞典』中

- 国人民大学出版社、2011年、86、733頁）。以下、『典章』と略記する。
- *154 「呉文鎔奏陳与巡撫崇倫戰守意見不合並自請罷斥片」（咸豐3年11月28日）（録副）『鎮庄檔案史料』第11冊、1994年、379-380頁。「片」は「夾片」とも言う。清制では、一つの奏摺では一つの事しか上奏できなかったのも、しついでに他の事も上奏したければ、奏摺の内容と関連があるうとなかろうと、別紙に書かなければならなかった。職名や年月日は記さず、「再」で始めて「謹奏」の二字で終わった（『典章』102頁）
 - *155 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻108（咸豐3年10月上）丙子條、659頁。
 - *156 「与呉文鎔」（咸豐3年10月初4日）『曾国藩全集』書信（一）266頁。
 - *157 「与駱秉璋」（咸豐3年10月初10日三更）『曾国藩全集』書信（一）281頁。
 - *158 「与駱秉璋」（咸豐3年10月18日三更）『曾国藩全集』書信（一）296頁。
 - *159 「暫緩赴鄂並請籌備戰船摺」（咸豐3年10月24日）『曾国藩全集』奏稿（一）76-77頁。
 - *160 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻111（咸豐3年11月上）癸卯條、718頁。
 - *161 「復駱秉璋」（咸豐3年11月初9日戌刻）『曾国藩全集』書信（一）344-346頁。
 - *162 「与駱秉璋」（咸豐3年11月15日亥刻）『曾国藩全集』書信（一）358頁。
 - *163 張亮基はなかなか手紙をくれなかった（「与張亮基」（咸豐3年2月15日）『曾国藩全集』書信（一）116頁、「与魁聯」（咸豐3年2月）『曾国藩全集』書信（一）130頁などを参照）。
 - *164 「復駱秉璋」（咸豐4年正月21日）『曾国藩全集』書信（一）472頁。
 - *165 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻112（咸豐3年11月中）癸丑條、739-740頁。
 - *166 江忠源（1812-1853）、字は常孺、号は岷樵、湖南省宝慶府新寧県人、道光17年に湖南郷試で挙人となる。『清史稿辞典』675頁。朱東安『曾国藩伝』37頁。黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻1、19、21頁。『職官』1697、2157頁。『日誌』280、283頁。咸豐3年に江忠源が手紙で、賊を討つには江・楚・皖の各省が戦船を数百隻造り、福建・広東水師数千人を呼び寄せ、まず江面を肅清してから三城を奪還することだと言ったことから、曾国藩の水師の議の萌芽が生まれたという（黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻2、25頁）。
 - *167 「復江忠源」（咸豐3年11月18日）『曾国藩全集』書信（一）366-367頁。
 - *168 黎庶昌撰「曾国藩年譜」巻1、11頁。ちなみに、曾国藩が北京で道学を学んだ倭仁は、咸豐帝に「決して敏腕家ではない[断無幹濟之才]」（『文宗顯皇帝実録（3）』（『清実録』42）巻118（咸豐4年正月中）丁巳條、33頁）と評されている。
 - *169 「復駱秉璋」（咸豐4年正月15日）『曾国藩全集』書信（一）455頁。
 - *170 陳源沅が知府をしていた安徽省池州府は咸豐3年1月19日（一説には1月22日）に太平軍に破られた（『日誌』224頁）。陳源沅はちょうど命を受けて浙江省嚴州府建德県を守っていたのだが、通報したのは1か月もたってからで、安徽巡撫は知府は行方知れずと上奏していた（「与江忠源」（咸豐3年4月16日）『曾国藩全集』書信（一）151頁）。4月9日に陳源沅からの手紙を受け取った曾国藩は、その無事を喜んだが、「賊匪が通ったあと、どうして3日以内に上申せず、1か月ほどたってから報告したのか。実におろそか[疏慢]である。現在叱責の軽重はすでに明文があるはずだが、残念ながらここでもにわかに見ることはできない。わが親戚は幸い生き延びたが、先はない[無復生涯]かもしれない」（「与陳源沅」（咸豐3年4月16日）『曾国藩全集』書信（一）151-152頁）と書いている。江忠源は、太平軍が襲撃してきたとき、「池州府知府・陳源沅（中略）が兵・勇を督率して、奮力防御した」（『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻115（咸豐3年12月中）己丑條、819頁）と上奏しているが、陳源沅の再起を助けようとしていたのではないだろうか。
 - *171 『文宗顯皇帝実録（2）』（『清実録』41）巻112（咸豐3年11月中）乙卯條、743頁。
 - *172 「崇綸奏報肝病復發請賞假調理摺」（咸豐3年11月16日）（録副）『鎮庄檔案史料』第11冊、236頁。

- *173 「崇綸奏陳總督吳文鎔坐守省城不敢出兵並請飭台湧迅速往剿片」(咸豐3年11月16日)(録副)『鎮
壓**檔案史料**』第11冊、237頁。
- *174 「寄諭吳文鎔等著仍遵前旨督兵出省進剿其省城防剿責成崇綸**佈置**」(咸豐3年12月初2日)(剿捕**檔**)
『鎮壓**檔案史料**』第11冊、398-399頁。
- *175 「寄諭吳文鎔等省城与荊州防守均屬緊要著与台湧協力妥籌」(咸豐3年11月14日)(剿捕**檔**)『鎮壓
檔案史料』第11冊、202頁を参照。
- *176 「吳文鎔奏陳与巡撫崇綸戰守意見不合並自請罷斥片」(咸豐3年11月28日)(録副)『鎮壓**檔案史料**』
第11冊、380-381頁。
- *177 「吳文鎔奏報与撫臣籌商仍應帶兵出省督戰片」(咸豐3年12月初7日)(録副)『鎮壓**檔案史料**』第11
冊、458頁。崇綸に、城壁をおりて役所に帰り、直接会って相談しようと言われたと吳文鎔は書い
ているところから、吳文鎔がまだ城壁の上にいたことがわかる。
- *178 「崇綸奏陳督臣吳文鎔不顧大局調度失機等情摺」(咸豐3年12月初10日)(録副)『鎮壓**檔案史料**』
第11冊、494頁。
- *179 「寄諭吳文鎔著趕緊渡江親赴黃州督剿責成崇綸**佈置**省城防守事宜」(咸豐3年12月17日)(剿捕**檔**)
『鎮壓**檔案史料**』第11冊、578頁。
- *180 「崇綸奏報省城留防兵單並現在布置防守情形摺」(咸豐3年12月26日)(録副)『鎮壓**檔案史料**』第
12冊、1994年、81-83頁。
- *181 「復吳文鎔」(咸豐3年12月初4日巳刻)『曾國藩全集』書信(一)393頁。
- *182 「復駱秉璋」(咸豐3年12月15日亥刻)『曾國藩全集』書信(一)413頁。
- *183 「復吳文鎔」(咸豐3年12月15日)『曾國藩全集』書信(一)412-413頁。
- *184 「籌備水陸各勇赴皖會剿俟粵省解炮到楚乃可成行摺」(咸豐3年11月26日)『曾國藩全集』奏稿(一)
80-82頁。
- *185 「瀝陳現辦情形摺」(咸豐3年12月21日)『曾國藩全集』奏稿(一)86-90頁。
- *186 「復駱秉璋」(咸豐3年12月24日)『曾國藩全集』書信(一)420頁。
- *187 「復駱秉璋」(咸豐4年正月初7日)『曾國藩全集』書信(一)435-436頁。
- *188 「復駱秉璋」(咸豐4年正月23日)『曾國藩全集』書信(一)476頁。
- *189 「崇綸等奏報探聞督臣營盤被焚兵勇潰散摺」(咸豐4年正月18日)(録副)『鎮壓**檔案史料**』第12冊、
302頁。
- *190 「諭內閣著將吳文鎔照經督陣亡例從優賜卹唐樹義照臬司例賜卹」(咸豐4年2月14日)(剿捕**檔**)『鎮
壓**檔案史料**』第12冊、510頁。
- *191 「寄諭青**麐**著密查該省督撫因何起衅不和等情據實具奏」(咸豐4年正月21日)(剿捕**檔**)『鎮壓**檔案史**
料』第12冊、322頁。
- *192 『文宗顯皇帝實録(3)』(『清實録』42)卷119(咸豐4年正月下)辛酉條、38頁。
- *193 『職官』1698、2725頁。「諭內閣著崇綸開缺暫留湖北協同辦理防剿事宜」(咸豐4年2月25日)(剿捕
檔)『鎮壓**檔案史料**』第12冊、634頁。
- *194 『文宗顯皇帝實録(3)』(『清實録』42)卷130(咸豐4年5月中)壬子條、309頁。
- *195 崇綸の上奏に、このことが記されている(「崇綸等奏報探聞督臣營盤被焚兵勇潰散摺」(咸豐4年正
月18日)(録副)『鎮壓**檔案史料**』第12冊、302頁)。
- *196 「縷陳鄂省前任督撫優劣摺」(咸豐4年9月27日)『曾國藩全集』奏稿(一)269-272頁。
- *197 「附録明諭二件 查明崇綸下落並押解來京」『曾國藩全集』奏稿(一)273頁。
- *198 『文宗顯皇帝實録(3)』(『清實録』42)卷148(咸豐4年10月中)丙午條、592頁。
- *199 三板船は「明清期の戦船」で、乾隆年間の『新寧県志』には、「三板船、71丈6尺、幅4尺2寸、喫

水〔入水〕2尺5寸。1槽7槳、小河の引き潮、入り海〔海汊〕の浅く狭いところを出入りしやすく、大船の及ばないところを助けることができる」と記載されているという。また次の行の釣鈎船は江蘇省揚州府泰州県でつくられ、主に蘇北の内河を航行する塩運船である（前掲『中国古船録』16-17、261-262頁）。

- *200 「報東征起程日期摺」（咸豊4年2月初2日）『曾国藩全集』奏稿（一）98-99頁。
- *201 『文宗顯皇帝実録（3）』（『清実録』42）卷121（咸豊4年2月中）辛巳條、71頁。
- *202 『文宗顯皇帝実録（3）』（『清実録』42）卷121（咸豊4年2月中）壬午條、74頁。
- *203 「請派大員辦捐濟餉摺」（咸豊4年2月15日）『曾国藩全集』奏稿（一）103頁。同じ上奏で、長沙の庫の金をかき集めても、1か月分しかないと述べている（104頁）。
- *204 曾国藩は咸豊元年に手紙で、喪中の江忠源に出征しないよう勧めたことがある。『曾国藩全集』書信（一）75、83頁を参照。
- *205 「復郭嵩燾」（咸豊4年正月25日）『曾国藩全集』書信（一）481-482頁。
- *206 『文宗顯皇帝実録（3）』（『清実録』42）卷122（咸豊4年2月下）乙未條、104頁。

Creation of the Xiang Navy by Zeng Guofan in 1853

Kaori Asanuma

The year 1853, the third year of Emperor Xianfeng's reign, was critical for the war between the Qing dynasty and the Taiping rebel forces. In that year, the Taiping forces successively occupied three important cities on the lower reaches of the Yangtze River—Nanjing, Yangzhou and Zhenjiang—and made Nanjing, under the name “Tianjing,” their capital. Under the able leadership of Yang Xiuqing, a hastily built fleet gave the Taiping forces an overwhelming advantage. Emperor Xianfeng was furious about the hesitation of the generals, especially Qishan in the north and Xiang Rong in the south of the Yangtze River, to fight. The emperor ordered a new fleet to be built hurriedly and sent to the front. In Hunan, Zeng Guofan succeeded in building this new fleet despite of his lack of status, experience and funds. As most people in Hunan were afraid of boarding a ship, recruiting crew members for the fleet was also a challenge. Zeng Guofan managed to make the necessary preparations and departed with the fleet in January 1854, but it was too late to rescue his friend Jiang Zhongyuan in Anhui and mentor Wu Wenrong in Hubei. The incompetence and arrogance of the Manchu officials generated much resentment among the Han Chinese officials, which persisted for a long time.